

【症例メアリー】（女兒、年齢：治療開始時7歳6ヶ月）

於・The Tavistock Clinic, Dep. for Children and Parents.
120 Belsize Lane, London. NW2, ENGLAND

- ・主訴；学校での目立った遅れ。学習課題についてゆけない。友だちを作れず孤立しがち。他の子どもたちからよくいじめられる。白昼夢あり。一時‘難聴’が疑われた。動作緩慢、手先が極端に不器用。但し、物語をつくるなど、想像力は抜群にいい。語彙および読書力は、並以上。
- ・生育歴；誕生後3日間、体重が充分でないという理由で、保育器で過ごす。授乳は、最初母乳が試みられたがうまくゆかず、6週間で人工乳に切り替えられた。7歳まで母親の膝で哺乳瓶を吸っていた。1歳まで風邪などで病院通いが絶えなかった。仕事を持つ母親に代わって、彼女の世話をしてくれるおとなたちが頻繁に代わっている。5歳時の入学までに、排泄訓練が完了しておらず、おむつをしていた。また着衣なり食事なりが、自分ではまるで出来ない。全般的に未熟。尿失禁が頻繁。一人っ子。
- ・家族背景；両親は四十代前半で、ユダヤ系の知識階層。母親は大学の講師。父親は司書。夫婦それぞれに己自身に問題を抱えているとの認識があり、過去に分析治療を受けている。父親は今尚も継続中。母方の祖父は精神科医、叔母はチャイルド・サイコセラピスト。従兄が2人いる。尚、メアリーの治療と並行して、3週間に一回の頻度で「親面談」が継続された。
- ・印象；外見は全体に締まりがなく、薄汚れた感じだが、その大きな黒い瞳に強い自己意識なり個性をうかがわせるものがあり、将来伸びるだろうといった力の充溢（competence）を予感させるものがあつた。歯並びが悪く、舌と顎がうまくかみ合わないような印象で、話し方に難あり（おそらく、指しゃぶりの常習癖が原因だろう）。しかし時折、おとなびた語彙を使う。注意力が逸れやすく、内閉的となる。
- ・治療過程；分析期間は1年7ヶ月（開始；1978/01/24～終了；1979/09/06）。週5回のセッション。

■資料その1；メアリーの心理テストの評価について（実施日時；1977年11月3日&7日）

- ・実施時のメアリーの年齢；7歳4ヶ月
- ・実施テストの内容；WISC（知能テスト）

Draw-a-man Test（人物画法テスト）

Neale Analysis of Reading Ability（読解力の分析）

Childrens Apperception Test（児童用統覚テスト）

▼総括；知能テストのメアリーの結果は、言語性検査ではIQ116（80%）で標準を上回る得点が得られた。動作性検査では、IQ104（50%）。これは、メアリーの現在の能力を正しい評価と見做していいかと思われるが、その一方で潜在的にはこれよりもっと高い可能性があることを示す兆候が示されている。彼女の絵画から、彼女が情緒的に未熟なレベルにあることが示唆される。また、メアリ

一の語る物語は、彼女が権威ある人物に対して葛藤を抱えていること、それで彼女が安全と感じられるためには自らを己自身のコントロール下に絶えず置いていなくてはならないといった強いニーズがうかがわれる。彼女の読解力は彼女の実年齢の標準をいくらか上回っている。

▼テスト実施中の態度&外見;メアリーの外見は、薄汚れていてまるで‘浮浪児’のよう。おかつぱ頭で、黒い髪の毛が彼女の額を覆い隠しており、時折それを手にして口でしゃぶるのが時折見られた。彼女は初対面のわたしに気後れする態度はまったく見せず、むしろどちらかというベタベタと‘馴れ馴れしい’といった印象があった。

テスト実施の間、メアリーは幾度もわたしからの励ましやら促しが必要で、また彼女のほうからもたくさんの質問がなされた。それら質問の特徴として、次のような両面が考えられるかと思われる。一つは、彼女は依存的で未熟であり、ゆっくりと事細かな指示を与えられることが絶えず必要で、しばしばそれらは何度も繰り返されることが必要であったこと。と同時に、彼女の質問には、理解力が鋭敏であることが示されていて、そこには聡明な子どもが持つところの資質がうかがわれた。

テスト実施の間、メアリーは熱心にわたしの気を引こうとし、自分のしていることに一緒に注意を傾けてもらいたがった。最後の辺りに至るにつれ、彼女は落ち着かなくなり、集中力が減退していった。

▼考察;

※WISC&Neale Reading Test Results

言語性検査において、メアリーの得点の殆どは標準をほんの少し越えている。しかしながら、「下位検査・類似」(the similarities subtest)においては、それは論理的および抽象的思考力を示唆しているのだが、この点に於いて彼女は標準をかなり上回っていることが示された。

動作性検査においては、再び彼女は標準を上回っている。但し、「下位検査・符号」(the coding subtest)を除いて・・・というのは、これは指示される内容に従い、それに集中しなくてはならないからでしょう。この「下位検査」の得点はかなり標準を下回って(well below)おり、それは彼女の他の結果からして凡そ予想される得点をはるかに下回っているといえよう。「符号」の低い得点は、「学習困難 learning difficulties」との関連でよく取り沙汰されるが、この場合のメアリーの低い得点は、彼女が動作の機敏性に欠き、そして集中力も欠いていて、結果的に処理能力が下がるものと説明されましよう。そしてそこには、彼女の「注意力のスパン(attention span)」が狭いといった問題がうかがわれる。

メアリーの読解力の年齢(reading ages)については次のように評価される。

Reading Rate(読解力):	8. 2歳
Reading Accuracy(正確に読む力):	7. 11歳
Comprehension(内容を理解する力):	8. 2歳

これらの結果は、彼女の読解力が彼女の実年齢を上回っていることを示唆している。しかしながら、潜在的にあるはずの彼女の能力を充分機能させていないのではないかと感じた。

メアリーは、わたしが彼女の誤りを訂正して介入することをなかなか受け入れようとしなかった。テストの終わりにはそれら訂正を認めたのだが・・・このことは、メアリーの‘指示 instructions’に従うことの困難を例証するものであり、それは彼女の学校での授業態度に影響しているとうかがわれる。

テストの結果からは、メアリーは高い能力を持ちながらも、現在のところそれが充分には発揮されていない子どもといったことが示唆される。集中力の欠如、動作が緩慢であること、そして「注意カスパン」が狭いことが、メアリーが未熟なありようでしか物事に対処できない原因になっていて、それで彼女はおそらく潜在しているところの能力を十全に発揮できずにいるようにうかがわれる。

※Draw-a-Man Test(人物画法テスト)

メアリーは、この課題に向かうことに尻込みする印象があった。どうしたら絵を描くことができるのか、途方に暮れているふうだった。彼女の絵は、精神年齢5、6歳児のそれのようであり、そしてここに、彼女はその実年齢にしては情緒的に未熟といえるレベルでしか機能していないことが示唆されよう。

※Childrens Apperception Test(児童用統覚テスト)

メアリーは、物語を作ることは得意のようで、とても意気込んで楽しげに語ってくれた。構成度も高く、想像的(imaginative)といえよう。彼女は物語をとおして不安感を出表することができるようであった。しかしながら、彼女は、提示されたカードのなかに攻撃性が明示されている場合には、それを直視するのにも耐えられず回避する傾向にあった。

メアリーの語る物語を分析すると、「誰が支配権 control を握るのか」といった意味合いでの不安感がかなり濃厚だということがうかがわれる。両親は彼女にあまり安心感(security)を保証してくれているようではなさそうだ。そして自らで己自身をコントロールせんとする必要性はこれを補う意味がありそうだ。また、メアリーはかなりの程度の怒りや攻撃欲を抱えており、それらをコンティンするのに格闘しているようすがうかがわれた。それでそれらを外的にも内的にも自らのコントロール下にながらりと置いたままにしておくことが必要であったのだろう。他者のコントロール下に我が身を置くことについて不安感があり、それがため彼女は他人を信頼することを出来ずにいるといったことのようなのである。そして彼女は、すべてにおいて絶対に確実でなくてはならないと思いついでいるようであった。わたしがくすべてにおいて絶対に確信が持てるかどうか、わたしにも自信はないわ>と言いますと、彼女はびっくりにした顔をした。なぜならば、メアリーは自分が傷つく(vulnerable)のはいやなのであり、物事について不確かであることなど耐えられないのだ。だとしたら、彼女にとっての学習とはひどく困難なことに思えるに相違ない。彼女にとって、誰かに依存することは脅かしおびや以外の何ものでもなく、それで誰か他人に信頼を寄せるとか、も

しくは誰か他の人から何であれもらうといったことに困難を覚えるようだ。さらには、誰かが自分よりも物事をよく知っていることも受け入れ難いといったふうにかがわれた。

メアリーは、どうやら親なる人物たちの間に於ける摩擦・葛藤などにひどく気を奪われているように見えた。そこから見て、どうやら親とは罰として^{おど}脅しの手を使うといったタイプの極めて弱体化された無能なタイプとして見做されているようだった。彼女の語る物語にはまた、あたたかな愛情深い関係性とか幸福といったことが著しく欠如していることが示されていた。

▼結論:

メアリーはそこそこ標準並の能力が備わっているようである。がテストの結果は彼女の潜在的な能力はもっと高いかもしれないということが示されていた。彼女はどうやらとても不安の強い子どもでありそうだ。日常的な「コンテインメント」の経験がごく限られているようで、それで自分の世界を、外的にも内的にも、がっちりとして自身がコントロールすることでどうにか保っているといったようすがうかがわれた。彼女は同年齢の子ども同士の交遊があまり得手であるとはいえないのだが、大人に対しては、依存的かつ未熟な振舞い方でもって近付き、よく反応する。こうした彼女の困難は、学習能力がごく限られていることからしても、教育面において表面化していることは確かなようだ。

ここで結論として、彼女には「個別のサイコセラピー individual psychotherapy」がお勧めでしょう。それで、彼女が自らの困難についていくらかでも自覚を得て、それらに対処するうえでもっと適切なありようを模索してゆくことができるのではなからうかと思われる。今後何年か経て改めてもう一度検査をすれば、メアリーに備わった真の知的能力をもっと正確に測定することができよう。それは将来の彼女の進路を判断する際に、とても重要なことにならうかと考える。

Helen Nowicki

Educational Psychologist

■資料その2;セラピーへの導入をめぐる本人及び家族との打ち合わせ

(日付;1978年1月17日)

[※同席者; Miss. Maureen Fox (PSW)]

メアリーとわたしは、われわれだけでまず最初に心理アセスメントの結果について話し合いました。そしてセラピーがお勧めだということを提案したのです。話している間、彼女はずうっと人形で遊んでいたり、部屋中をうろうろ歩き回っておりました。彼女は、或る面に於いてはよく機能することができるという評価については同意しましたし、また或る面に於いては困難を抱えているということも難なく認めました。例えばそれら困難とは、彼女が他の子どもたちよりも動作が遅いこと、そして時折夢うつつの状態にあるといったことです。さらに、彼女がさまざまな状況に於いて怒りやら悲しみの感情を抱くことについても触れられましたが、それについてもメアリーは自由にあれこれ自らの気づきを語りました。

セラピーということについては、メアリーは以前母親からそれについて聞いていたということ、それでセラピーに通えたらいいなと思っていること、それは今よりもずっと勉強が出来るようになるのではないかと思うからだと語りました。彼女はセラピストがどんな人なのか興味を示し、その人が‘すてきなひと a nice lady’かどうかを尋ねます。このセッションで、わたしと会うのはこれが最後だということをわたしからメアリーに伝えられました。

それからわれわれは、Miss.Foxと彼女の両親とが面談している部屋に戻りました。メアリーはどんなことが語られたかを両親に語り、改めてセラピーに通うことへの意欲を示しました。そこでわたしがこれからメアリーの学校と連携を続けてゆくことを提案し、そしてメアリーがセラピーを開始する前に一度学校を訪問することについて両親から同意を得ました。それでこれから先も何かあればサポートをする態勢にあることを彼らに伝えました。

われわれがこうした事柄について話し合っておりました間、母親のMrs.Rの印象は、前回とはちょっと違ったふうで、何やらシャキッとしていて、温かみもあり、母親らしい感じでした。彼女はまたメアリーがセラピーを受けることにとても熱心で、夫のMr.Rの態度が依然として積極的でないことに苛立っておりました。Mr.Rはいくらか不安げで苛立ったふうでセラピーについての懐疑を訴えました。しかし実際にメアリーが治療を受けることに反対は敢えてしないとのことでした。

こうした話し合いが為されている間、メアリーはいくらか焦れてまいりました。もうたびれたと言ったり、そして振る舞いが落ち着きのないものになってまいりました。Mrs.Rはこれには厳しい態度を取り、メアリーは皆の話し合いが済むまではじっとおとなしく待ってなくてはならないと告げます。しかしながら、話し合いが終わったとき、メアリーは絵が描き終えてないと言って、皆を待たせました。このミーティングの終わりに、Mr. & Mrs.Rは来週の木曜日にMiss.Yamagami とMiss.Foxに会うことが取り決められました。

Helen Nowicki

Educational Psychologist

■資料その3;メアリーのセラピー開始についての確認事項 (日付;1978年1月19日)

Mr. & Mrs.R とのミーティングに於いて、メアリーは、Miss.Yamagami との週5回のセラピーを1978年1月24日に開始することが取り決められました。

セッションの日程は下記のとおりです。

月曜日 11:30-12:15
火曜日 4:45-5:30
水曜日 4:45-5:30
木曜日 11:15-12:00
金曜日 11:15-12:00

Miss.Foxは、両親と3週間に1回、継続して面談が予定されます。火曜日の4時45分からで、開始は1月31日(火曜日)になります。

Miss.Nowichi(EP)は、学校を訪問し、メアリーのセラピーについて話し合い、今後彼らとの連携を定期的に図ることになります。

Maureen Fox

cc Miss. Yamagami
Mrs. Nowicki
Maureen Fox
Mrs. Rustin
File

■資料その4;学校訪問についての報告書

・(初回) (日付;1978年1月20日)

学校に着きましてから、校長先生のMiss.K にお会いするのに10分ほど待たされました。それから彼女が現れますと、残念ながら30分程しか時間がないとおっしゃいました。またメアリーの担任のMrs. T、そして前任の先生も同席しておいででした。

わたしが何か話そうとするのを遮るようにして、Miss.K はわたしがメアリーの両親にどのくらい会っているのかと尋ねました。わたしは両親とはアセスメントの際に会ったことを伝え、そのアセスメントについての説明を致しました。その結果は、彼らのメアリーについての印象に一致するものようだということが語られました。彼女が潜在している能力ほどには実力が発揮されていないということ、そして彼女の情緒的な問題が彼女の学習を妨げており、十分に学習状況を活かさずにいるといったこと・・・。それについて彼らの意見を伺いますと、皆さん異存はないとのことでした。

Miss.K は、メアリーの情緒的な問題とはどこに由来するのか、家庭か学校か、いずれかを問います。わたしは、メアリーは年少期から問題を抱えていたことを説明しました。そして学校が彼女のために安定した環境(a secure environment)を提供してきたし、これからもそうであろうと述べたわけです。

それからわたしはメアリーがセラピーを受けにクリニックに通うということを語りました。そしてその週の予定表が告げられました。つまりそれは授業中に退出しなくてはならないということになります。Miss.K はなんでセラピーなのかと、むしろ敵対心を露わにしました。この敵対心には2つ意味がありそうです。一つは、メアリーの両親に対してであり、つまり彼らこそ責めを負うべきであり、治療を受けなくてはならないのは彼らであって、メアリーではないといったことです。それからもう一つ、メアリーの両親は教育というも

のについて、さもすべてを知っているような顔をしているけれど、いざ実践という面では何ら分かっていないといった、Miss.Kの個人的な感情をも吐露されていたようであります。

彼女は、われわれが果たして彼らをよく熟知したものでどうか、それとも彼らに都合よくまんまと嵌められたのではないかと尋ねました。彼女は彼らもクリニックに通うのかどうか知りたがりです。そこでわたしは今後メアリーの治療には両親もまた並行して面接が継続されることをお伝えしました。

これとは別に、Miss.Kの敵対心はクリニックにも向けられているようでした。メアリーはまだ幼いし、どちらかというといずれ自分のことが自分で出来るようになるのを待つやりの方がいいのでないか、何も治療機関に行くまでもなく、このまま学校で援助されてゆけば充分ではないかといったことです。

わたしは、学校とメアリーの両親との間を取り持つ役目をするを提案いたしました。今後彼らに疑問やら悩みやらが生じることもありましようからと。わたしはメアリーが安定した環境で治療を続けられることがとても重要であり、クラスからの退出そしてセッションからクラスへと戻ってゆくことが可能な限り円滑になされることを説明しました。それから、時としてセッション後メアリーが怒っていたりもしくは抑うつ的であったりすることもありましようから、そうした際の彼女に対処しなくてはならないとしたら、難しい状況に出くわすことになるかもしれないということもお伝えしました。

Mrs.T は、メアリーがどんなふうを感じるかはあらまし了解なされたふうで、ミーティングを通してとても同情的で、メアリーが抱える問題についても充分自覚を持たれたように見受けられました。彼女はメアリーがセッションから戻った折にクラスの皆にうまく溶け込めるようにどう配慮すべきかについてはよく洞察しておられるようでした。

Miss.Kは立ち上がり、ミーティングの終わりを告げました。そしてわたしはメアリーがセラピーを開始した後に出来たらすぐにでも、訪問したい旨を伝えました。Miss.Kともう一人前クラス担任の先生が退出なされた後、わたしは残ってくださったMrs.T と次回のことで打ち合わせを致しました。次回は彼女とだけ会うということになりました。彼女はわたしを玄関口まで見送ってくださいました。

Helen Nowicki
Educational Psychologist

・(第2回目) (日付; 1978年2月20日);

メアリーの担任の先生のMrs.Tは、ミーティングが今週だということをつっかり忘れていたとわたしに謝りました。わたしはそれで、Miss.Kにはお声を掛けていないのですが、彼女もご一緒したいとおっしゃるかどうか、いかがでしょうと問うと、Mrs. Tは、Miss.Kは今とても忙しいのでダメでしょうが、いずれわたしのほうから、報告をしておきましようとおっしゃいました。

それからMrs.Tは、メアリーがクリニックに通うことでは何ら問題は生じていない旨語りました。事実メアリーはとても活気づいてきてハッピーで、クラスの中にもうまく溶け込んでいるということです。しかし彼女はクリニックに通っていることについては全然何も語ろうとしないとのこと。Mrs.Tは、メアリーにクリニックでのセッションはどうなのと一度尋ねたことがあったそうです。でも彼女の返答は、お勉強がもっとできるようになることの助けになると言っただけなんだとか。そこで、さらにMrs.Tの気持ちを採り上げました。メアリーが学校からクリニックへ通うことで何が起きているのかを知らされずにいること、それでまるで‘蚊帳の外’にでもいるように感じることなど…。Mrs.Tはそのとおりですわと認めました。彼女はセラピイのセッションでどんなことが起きているのか知りたいと思っていたのだそうです。そこでわたしは、それが遊戯療法(play therapy)であり、メアリーは玩具を与えられ、それで遊ぶこともあったり、また絵を描く道具も与えられるといったこと。それでそれらを使って、自分の感情(feelings)をあれこれ模索してゆくことになることと説明いたしました。Mrs.Tは、メアリーはホリデーの間もセッションはあるのかと尋ねました。それで可能な限りセッションの時間を守り、規則的であること、それでセッションをなるべく欠席しないことが重要である旨伝えました。Mrs.Tは、実はクラスは或る特別な集会を企画していて、週ごとの活動がその集会で決められるのだが、メアリーはそれにセッションのために出席できないでいるということをおわたしに説明いたしました。

わたしは、メアリーの両親からメアリーがクリニックでのセッションに通うことについて万事うまくいっているかどうか何かしらお聞きかどうかを尋ねました。Mrs.Tは、メアリーの母親がかつてメアリーは家ではなかなか言うことを聞かない(naughtier)と語っていたということをお思い出します。だが、メアリーを学校に迎えにくることについては今のところ何ら問題は起きていないようであります。Mrs.Tは、時々メアリーがクリニックへ行く時間を頭から失念していることがあると正直に語りました。その時間帯というのが、何かしている真っ只中だったりするものですからと言い訳します。メアリーも同じく忘れていることがあるんだそうです。でも彼女の両親は常に確実に彼女を迎えに来ているんだとのことでした。

それで、他の子どもたちからは何か反応がありますかと尋ねますと、子どもが一度メアリーはどこに居るのかと尋ねたので、或る特別なレッスンのために出掛けているのだと答えたとのこと。他にも或る用事で毎日学校を途中で抜け出る子どももおりますし…、とのことでした。

Mrs.Tは、セラピイが途中で打ち切りになるとか、子どもと反りが合わないなどの理由で、セラピストが交代するといったことはあるのか、と尋ねました。わたしは、それはちょっとあり得なくもないでしょうが、滅多なことではないものと思われるし、あれば深刻な問題になるだろうと説明します。再び彼女について何が起きているのやよく状況が把握できずにいることで‘蚊帳の外’扱いにされていると感じることがあるだろうことを示唆し、或る意味自分がうまくやれなかったからとか、それで他の誰かがそれでもっとうまくやれているといったことなどを考えたりしているのではないかと尋ねます。Mrs.Tは、これを幾らか認めながら、<でも、そうとも言えませんわ。わたしには他に34人の子どもたちがおりますし…>と応えました。そして誰かこうしたことについてお話し合いできるチャンスをいただいたことはとてもいいことに思える

とも…。なぜなら他の先生方とはこの件でお話できませんし、それは状況がうまく飲み込めないでしょうから、それにメアリーの両親ともうまく話し合える気がしないのだといったことも語られました。

彼女は、メアリーから懸念していたような反応がほとんど見られないことに正直なところ驚いているということ进行了。わたしは、それはいずれそうした事態が起こるかもしれないし、それもよくは分からないのですが、と述べました。いつか彼女が困難な時期を迎え、クリニックに行きたがらないといったこともあるかも知れず、そのときはちょっと余計目にサポートが必要になるかと思われると伝えました。

Mrs.Tは、それからクラスに戻らなくてはならないと言いましたので、メアリーについて何かお話ししたいと思われたときはいつでもお電話くださいとお伝えしました。いずれにしても来学期になったらまたこちらからご連絡を致ししようと…。

Helen Nowicki (Mrs)
Educational Psychologist

・(第3回目) (日付; 1978年6月12日);

わたしは学校に着きましてから、まずは校長先生のMiss.Kにお会いしました。メアリーがどんなふうかぜひ聞かせて欲しいとのことでした。それから、メアリーがセラピーを受けることに彼女が全面的に反対であったのは、両親こそがセラピーを受けるべきであって、メアリーはむしろ放っておかれて自然に成長するのを待つほうが良いという見解であったからなのを改めて述べられました。その理由というのも、メアリーの両親は彼女をあまりに構い過ぎ、何でも自分でさせることが出来ず、結果的にメアリーは赤ちゃんみたいで、何も自分で出来ない子どもになっているということでした。

クラス担任のMrs.Tがお越しになりましたので、わたしは、メアリーが現在どんな状態かを尋ねました。Mrs.Tが答えるには、前学期セラピーが始まった頃には随分と飛躍的に伸びたという印象であったが、それも、メアリーにどうやらセラピーのお蔭でお勉強がもっと出来るようになるといった思い込みがあったからではないかとのこと。だが、それも今学期に入り些か減速ぎみで、彼女は以前と同じような状態であり、集中力も以前と同じほどにまったく芳しくないとのこと。その例として、今朝書き方の授業で、たった3語を彼女は書いただけであったということを挙げました。

Miss.Kは再び、メアリーが家庭では自分のことを自分で自由にやらされていなかったことを进行了。そして彼女が10歳か11歳になった頃には問題はなくなるのではないかという見解を示しました。そして両親はメアリーを一人にしておくのがいいのだとも…。彼女は、実際のところセラピーにどんな益があるのかと疑念を表明しました、それでわたしは、この面接中何度かそれについて説明を試みました。メアリーがセラピーの状況において感情(feelings)を表出し、それで自ら抱える問題を‘徹底操作(ワークスルー)’することが出来るということ。それら問題とは、実に彼女の潜在的能力が発揮されるのを、そして彼女が人との関係性をつくりあげることをも妨げているということも…。Mrs.Tは、メアリーはセラピ

イのセッションでは彼女一人だから、親に頼ることもせずすべて自分でやり遂げなくてはならないでしょうから、それだけでも彼女にとっていいのではないかと思う、と述べました。

彼女はまた、メアリーの服装やら外見がずうっとましになっていることを語り、確かにいくらか身綺麗になってきたということを語りました。それに食事をする際に、ぼろぼろ床にこぼしていたのがそうでもなくなっているとも…。他の子どもたちは依然として彼女の隣の席に座ることを嫌がり、メアリーは他の子どもたちともうまく付き合えずにいるといった点をも語りました。そして新参の子どもが来ますと、メアリーには近付かないほうがいいと子どもらが言うてみたいだとも…。Miss.Kは、そういうことはよろしくないから厳しく言って子どもたちに止めさせなくてはならない、と横合いから助言しました。Mrs.Tは、クラスにはとてもやさしい女の子らもいまして、メアリーを仲間に入れてあげて、そして自宅でのパーティーにも招いてあげたりもしているということを語りました。

ここでMiss.Kは、たぶんメアリーが他の子どもたちと一緒にグループに加わるようになれば、彼らとどう付き合えばいいかを学んでゆくのではなからうかと示唆しました。わたしは、メアリーは目下彼女自らの内に抱えているたくさんの感情(feelings)と格闘しているところであり、他の子どもたちとのことにはまだ対処しきれないだろうと示唆します。

Miss.Kは、両親こそが治療を必要としているということに再び話を持ってゆきました。彼らがどれほど学校内でも他の父兄たちから不人気であるかということ。そして、Mr.Rは職場でも‘孤立している’といったことも…。Miss.Kは、毎朝子どもに連れ添って教室に入る親御さんというのは彼らだけだということ語りました。これはMrs.Tの問題であるようですので、Mr. & Mrs.Rにメアリーを連れて教室に入らないようにと説得することがどうしたらできるか話し合われました。彼女は、今のクラスを来年も引き継ぐことになりそうだということでしたので、新しいクラスになるわけですし、メアリーを教室の入り口まで連れてきて、そこでさよならするといったことを彼らに要請したらどうかということが話し合われました。同年齢の子ども親御さんたちはどなたもそうしてるわけですし、彼らだけがメアリーを特別扱いしているということになるのもいけませんし…。Mrs.Tはそれを考えてみることにいたしましょう、と応えました。

Mr. & Mrs.Rこそが治療が必要だという見解にMiss.Kはひどくこだわっておりました。それでメアリーが家庭内でどんなふうにごうした両親に対処しているのかと語りましたので、わたしは、メアリーのセラピをサポートするためにクリニックに彼らもお話をしに通っておいでだということを少し話しました。Miss.Kは彼らと面接している担当者の名前を知りたいがります。わたしはMiss.Foxであることを告げました。Miss.Kは、Miss.Foxに、両親にメアリーのことはあまりかまわないように、少しは放っておくのがいいと言ってくれるようにとわたしに告げました。わたしはまた、セラピがメアリーに自らの内なる感情(feelings)を少しでもうまく処理できるよう助けになるとすれば、両親との関係においてもそれがいくらか助けにならないわけではないと語りました。

それから、わたしは近々クリニックを去ることになっていることを説明し、それでMrs.T及び学校としても、これからも尚クリニックの誰かと連携を取り続けてゆくのはどうでしょうかと提案しました。Mrs.Tは、それは興味深い、それがどれほど有益なのかはよく分からないにしろ・・・ということに同意しました。Miss.Kは、Mrs.Osborneが後を引き継いでくださればいいのではないかと示唆しました。学校には他にも既にお世話になっている子どもがいることですし、彼女の担当リストにもう一人子どもを加えるといったことになるということ・・・わたしはまた、Miss.Foxも近々退職することになっているのですが、セラピストのMiss.Yamagamiはまだ当分クリニックに留まる予定であることを告げました。Mrs.Tは、それがともかく一番大事なことでしょよね、と語りました。そしてどのくらいセッションがこの夏にお休みするのかと尋ねました。わたしはその点についてはまだはっきりと把握していないのだけど、おそらく学校のホリデーよりは短いものと思われるということを説明しました。

わたしは何か他に話し合う必要のある課題はあるかとお尋ねしましたら、ありませんということでしたから、ここでわたしはさよならを告げました。最後に、クリニックと学校との連携についてご協力いただきまして有難うございましたと、わたしへのねぎらいの言葉をいただきました。

Mrs. H. Nowicwi
Educaional Psychologist

・(第4回目) (日付; 1979年2月9日);

わたしは、校長先生のMiss.Kとメアリーのクラス担任のMrs.Tにお会いしました。

お二人にはまずお揃いでご一緒いたしました。Miss.Kは去年Miss.Nowickiが訪れた際に語られたあれこれを蒸し返すかのように語られました。彼女は、メアリーの治療に反対であるといった当初の見解を繰り返しましたが、それもいくらか以前よりは語気は弱まっておりました。両親に対する敵対心は依然としてかなり執拗なものでしたが、それでMiss.Kにそうした感情を表出するだけの機会を充分与え、そしてわれわれとしても、両親と定期的に面談は続けているが、何かしら意義深い変化があるかという、それもなかなかだということを認めたわけであります。それからようやくメアリーについての話し合いへと移ってゆきました。治療がとにもかくにも、メアリーに今の状況を持ち堪えさせるのにいくらか助けになっていることでもあり、そしてセラピイが彼女に自立心 autonomy を養う助けになるやもしれないといったわたし側の主張はMiss.Kにとっても理解しやすいものであったようで、治療という概念の理解がこれでどうにか受け容れやすいものとなったようでした。それでも、わたしがMiss.Kが語っておられるところの両親の学校での振る舞いの背景にはどれほど心穏やかならざるもの(insecurity)があるかということを指摘しましたところ、それでもまだいくらか彼女のうちには両親に対しての敵対心を引き摺っている感がうかがわれました。これをサポートする意味で、これまで訪れていた担当のワーカーが去年の夏にクリニックを退職したことでどれほどご心配をお掛けしたかということ語りました。そんなことはないと言論を唱えましたが、彼らがこの件では彼女に依存していたことはあきらかなのです。

メアリーについて、彼女にどのような進歩が見られるか、Mrs.Tからその全体の印象をお話いただくことは出来ませんでした。時にはいくらかそのようなことを彼女は事実語っているように見受けられたのですが。というのは、校長先生はセラピーが有効であるはずがないと躍起になっている感がありましたから、どうやら彼女はそのような指示を受けていたのではなかったかとわたしには推測されたのです。彼女は、絶えずMiss.Kのほうを見遣り、そうですねといちいち承認を得るといったふうでした。ここでメアリーがどうやら外見からしていくらか身奇麗になってきていること、それは外見もそうだが、中身もいくらかすつきりしてきているように見えませんかしらねとわたしが言いますと、Mrs.Tはすぐにそれには文句なしの同意を示しました。メアリーの交遊関係には大して進展はないということでしたが、一人仲良しが出来、ルイズという名前の女の子だそうです。だが、ここで何よりも問題になっていたのはメアリーの学業成績なのでした。このミーティングの終わり間際になって、ようやくMrs.Tはこの2週間ほどの間に、メアリーがなかなか目立っていい成績を取めたことを語りました。どうやら学校はメアリーに対してはポジティブであり、彼女を愛くるしい子どもと見做しているようでした。

わたしは、そうした学業成績がクリニックでのセラピーに直接関係する事柄ではないことをはっきりさせたうえで、彼らがメアリーの学習面に大いに尽力しておられることに頼もしく感じ入っておりました。ここでMrs.Tはいくらか嘆願するかのように、<メアリーがもう少し学校に居る時間が長ければいいんですが。特に金曜日の午前中の時間、それはとても重要な科目がありまして、今それに彼女は出席できません。それに出席できるように、セラピーのセッションの時間の変更をお願いできませんでしょうか・・・>と提案されました。わたしは、それは難しいかとも思われるが、とにかくいずれセラピーの担当者にその旨お伝えいたしましよと返答しました。それからわたしは、このことはご納得いただけますかどうかですが、子どもにとってセッションの連続性が維持されることはとても大事であり、それに守秘義務 (confidentiality)ということもありますから、そうしたわけで子どもがセラピーのセッションについて学校で語ることは滅多にないものと思われる、と説明いたしました。この点については、どちらの先生もご了解くださいました。

Elsie. Osborne (Mrs.)

■資料その5;メアリーの転校をめぐる

・(No.1) Educational Psychologist の報告書

※Mr. & Mrs. Rへの電話連絡について(1979/07/03&04)

先刻両親から依頼のあった、メアリーの心理検査(実施時;1979/06/20)の結果についての報告書を「Cavendish School」宛てに送付する件で、両親の承諾を確かめるために自宅に電話しました。わたしはそれらの内容についていくらか説明し、彼らからそれで結構ですとの返答を得ました。彼らはこの時点でFleet Schoolの校長先生にはまだこうした動きを知られたくない旨念押しなさいました。Mrs.Rは、クラス担任のMrs.Tには内密にということですので話してあると述べられました。わたしが

電話を2つあちらに入れる間に、「親の会(a parents' evening)」があり、その際に、彼らはMrs.T に状況を伝えた模様です。Mrs.Tの考えとしては、いずれCamden地区で実施される「11+」の全国テストを受けてから進路を決めるのはどうか、それもありではないかと語られたとのことでした。彼らは、Mrs.Tからメアリーが随分と進歩してきたことを(それもごく最近なのですが)報告してもらっており、それで大いに前向きになっておいでの様子でした。メアリーの今回の心理テストの結果からしますと、彼女の「読解力の年齢(reading age)」は10歳と判定されました。それにも関わらず、両親は「Cavendish」への転校を真剣に考えておられまして、それもどうやらその校長先生が、メアリーを彼女の年齢よりも下の子どもたちのクラスへ配属してもいいとおっしゃっているとの理由からのようです。彼らはまた、他に「Northbridge School」はどうかとも考えておられましたが、その校長先生は、メアリーはさほど知能が高いとは言えないとおっしゃられたとのことでした。

※Mr. & Mrs. R とのミーティングについて(1979/07/11)

わたしは、報告書を「Cavendish」に送付しておりますが、まだ受理されてはいないようです。しかしながら、Mr. & Mrs.R は、学校側がメアリーを受け入れてくれる見込みは大いにありと自信をお持ちのようでした。われわれは、この転校をめぐる、その利するところと不利となることを吟味いたしました。転校すれば、メアリーはごく少数のクラスに入ることになりますし、今よりもっと教科学習に力を入れる授業内容になるかと考えられます。そうすると、これでCamden地区の「11+」への移行の可能性は減じることになるわけですが、メアリーはこの転校するということをひどく喜んでいるようすです。両親は「Cavendish」の学校の教師たちはとても同情的(sympathetic)だというふうに感じたとのことでした。Fleet Schoolの先生方にも充分同情的な先生たちでありますし、それで同様に、メアリーについてもっと学業成績があがるようにといった援助をしてもらえる可能性はあるだろうといったことをわたしが語りますと、彼らはそれに同意し、異議を唱えることはしませんでした。他の可能性についても話し合いましたが、どうも今ひとつその先の見通しが見えないといった感じでした。彼らはMrs.Tには、親の見解として、メアリーには少数の子どもたちのクラスが向いていることを主な理由に、転校は「11+」の全国テストを受けるのを待つまでもなく、今の方がいいだろうと判断したと説明したようです。

われわれは心理テストの結果の詳細について語ってまいりました。そしてわたしの「報告書」にどのようなことを記載されたかをすべてお伝えしました。これは、或る意味で、彼女の言語性能力(verbal ability)が高いということが示唆されておりますので、アカデミック(academic)な学業成績に期待できるものがあるということになります。が、その一方で、彼女は指示(instruction)に従うこと、それにそれらの指示内容を長く心に保持しておくことができないという問題を抱えておりますので、どれほど今後彼女に期待できるかは定かではないといったことです。Mrs.Rが執拗にお尋ねなので、わたしはメアリーを楽観的に言って「上位(top)5%」に位置づけるということを申しました。しかしそれも現在のメアリーの注意力の散漫が或る程度克服されればの話だが、と念押ししておきました。Mrs.R は、そうだとしたら、今後メアリーはどんな学校にも入学が受け入れられるということにならないか、それでは「South Hamstead」はどうでしょうと意気込んでお尋ねでした。そこは「上位(top)2%」の子どもが入るところで

あるようだと言いました。両親のどちらもこれには驚きを示しました。わたしはメアリーについての心理テストの総合評価がいくら過剰に楽観的であったかもしれないと思い、ここでいくらトーン・ダウンさせてお話を続けました。しかしミーティングの終わり頃になって、Mrs.R は、初回の心理テストの結果にうかがわれたメアリーの学業成績の低迷をもたらす機能全般の低下の問題、そして最近めきめきと進歩しているといったことを考え合わせると、多くの点で実に腑に落ちる思いがするという話を語りました。つまりのところ、彼女はおそらく今や「ブレイクスルー」に近付いているのだらうということ・・・わたしは、それもそうかも知れないと同意しました。そしていずれメアリーが成長するに従って、メアリーの特色がもっと発揮されてゆくとも考えられると述べました。しかし、今から確かなところを予想することはできないわけで、でもおそらく「South Hamstead」のようなアカデミックな学校はメアリーにはどちらかという野心的過ぎるかもしれないと強調しました。両親はわたしに、ご援助いただき、とても有り難いとお礼を申され、そしていずれ近々判断したところをお伝えしたい旨お約束されて退出なさいました。

E. Osborne

・(No.2)メアリーの母親からEducational Psychologist宛の書簡 (日付; 1979年7月20日)

Dear Mrs. Osborne,

先日お会いいただきましてお話致しました件についてですが、ご報告申し上げたいことがございます。実は、先日「The Cavendish School」の校長先生からお電話をいただきました。あちらでは、メアリーが彼女の実年齢と同じ子どもたちと一緒にクラスでもやれなくはないかもしれないということをお考えだそうです。もしもメアリーがしっかりと「九九」を暗記し、日記を毎日書くこと、そしてインクを使うペン習字のお稽古をすることが出来ればということのようでした。

このことを伝えられますとメアリーはすっかりその気になり、早速に「九九表」の暗記に取り組み始めたという次第です。こうした事態は、いずれ近い将来に於けるメアリーの「中等教育 (secondary)」の進路についていっくら見通しを立てられそうに思われ、とても安堵致しております。

尚、わたしはMiss.K に手紙を書きまして事情をご説明いたしました。Fleet Schoolの先生方は皆さん、少なくともMrs.T は、われわれがメアリーの転校を考えましたことに同情的でおいでのよう感じしております。では、今後ともよろしくお願い申し上げます。

S. R*****

■資料その6;メアリーの治療過程についての総括的臨床レポート

(日付; 1979年9月30日)

振り返ると、今尚も最初にメアリーを目にした時(1978/01/24)、わたしのなかに生じた強烈な戸惑いが鮮明に呼び起こされる。彼女は見るも哀れな風体なのであった。その身なりが薄汚れていて実にみ

すばらしい。話し方はたどたどしく、時には大人びた語彙をまじえるにしても…。それに気持ちが内向きで、わたしの話し掛けに注意力を長くは維持できず、すぐにあらぬ方へと逸れてしまう。恰も彼女の身の回りに起きていることが意味をなさないみたいで、「今・ここ」からどこか別のところへと気持ちが彷徨ってしまふ。いつもからだに心もとなげで、支えが欲しいのか、隙あらばわたしのからだに凭れかかろうとしたり、何かしら身体的に‘触れられる’ものを絶えず希求している。気もそぞろで、もうそれしか念頭になんといった風情だった。そうした場合にもわたしは彼女を支えるべくわたしのからだを彼女に与えることをしなかったので、彼女はどれほど頼りなく不安で仕方がないかといったことを頻りにこれみよがしにあらわにした。セッション中に何度も何度もプレイ・ルームのあちこちで家具なりわたしの脚などに頻繁にからだをぶつける。そして転倒し、それで痛い思いをするといったこと。彼女が手にするモノはどれもこれも掌の中からあっけなくもポロポロと床に落下する。そして辺り一面床がそうした散らかされたもので埋まった。その光景は無惨というか、呆れんばかりなのだった。メアリーは確かに、いかにも産まれたばかりの赤子のようにあまりにもいたいけなく、従って誰もが一人にしておけないといった具合に思わず彼女を抱きかかえんとする衝動を触発されるような風情があった。7歳半にもなる彼女は、この時点で外界に根ざした「外なる子ども(outer-child)」ではなく、尚も母親に胎内にうづくまる「内なる子ども(inner-child)」そのままといった印象でしかなかった！

対象との一体感の希求は熾烈であり、セッション中わたしとの距離(溝)を埋めんとして躍起になる。セロテープ、のり、糸、あるいは彼女自身の‘舌’なり‘顎’なり‘唾’さえも総動員される。だが、いつも無駄だという落胆に落ち着く。そこで繰り広げられる彼女の遊戯の主たるテーマは「死」、「損傷」そして「紛失」。どこにも自分をしっかりと支えてくれる誰もいないといった孤兒的焦燥が顕著であった。その内的対象の様相は、老いて消耗の著しい「母親オッパイ」に、脱価値化された浮浪者「父親ペニス」といったところ。この場合の浮浪者(ホームレス!)というのは、つまりは‘略奪者’という意味にもなる。「母親オッパイ」に近づく者は誰であれ、彼女は警戒の眼を光らせる。例えば粘土で‘蛇’を作りながら、こんな話をした(1978/01/25)。蛇が草叢に潜んでいる。そこに毛布を入れたザックを背負った浮浪者が通りがかり、蛇がその足に噛み付くといったこと。奇妙にも彼女の両腕にはあちこちいっぱいかすり傷があった！それも＜蛇がやったの。何時かは覚えがないけど…＞と彼女語る。つまりは、かつて彼女から「母親オッパイ」を横取りした「父親ペニス＝乳首」を彼女は言っているのだ。それで彼女はそれに同一化し、猛烈な反撃を試みる。‘蛇’になつたり‘猫’になつたり…。「母親オッパイ」との一体化を邪魔するものはすべて敵となり、メアリーは情け容赦しない。徹底抗戦するということらしい。ここに「幼い赤子のエディプス」のメアリーがいる！彼女の疑惑は「父親ペニス」のみならず、母胎を横取りした「内なる赤ちゃんたち」にも向けられる。それで彼女はテーブルの上に両足を投げ出し、股を大きく広げ、そこで粘土でつくった‘蛇’をハサミで切り刻む。ガッガッガーと猛々しく唸り声をあげて「糞便製造マシン」と化す。実のところ、この意味は「蛇＝父親ペニス＝内なる赤ちゃん＝糞便」であり、その狙いは彼らの殺戮にあった。さらには、彼らに取られるぐらいならばと、‘蛇’となった彼女は「母親オッパイ」に忍び込み、中身のありつたけを略奪する。例えばクルミの殻。‘蛇’となったメアリーは歯でこじあけて、中の実を舌で吸い上げるといった話。だからクルミ(＝母親オッパイ)は空っぽというわけ

(1978/02/03)。事実、メアリーは舌を突き出し、ペロペロと舌なめずりをする癖があった！メアリーの「母親オッパイ」への口唇愛的‘貪欲さ’がゆえに、この‘空っぽ’ということが問題となる。転移状況でいえば、セッションでのわたしは疲弊したまま、彼女に何も良いものを与えられない、そうした侮蔑の対象になる外ない。彼女の心の中で「擁護者としての父親ペニス」はまだ登場することはなく、それどころか徹底して排斥されている。(因みに、家庭でメアリーは両親の諍いの折、彼らの間に割って入り母親に加勢し、父親を足で蹴ったり爪で引っ掻いたりすると聞いている。)それだからだろうか、わたしは彼女の物語によく出てくる「おばあちゃん(Grannie)オッパイ」というわけだ。であるからこそ、わたしの‘内側’にしっかりとコンティンしてもらうことへの不信感は根深い。つまりのところ、わたしは「穴だらけのオッパイ=お尻」、だからメアリーはポトンと落下する糞便にも似て・・。

しかしながら、毎週月曜から金曜までの5回のセッション、そうした週が重なるなかで、やがて何らかの連続性(continuity)という感覚が目覚めてきたようだ。つまりはアルがナイになり、またアルになる・・といったこと。それでどうやらわたしやセラピールームへの愛着といったこともわずかながらも芽生えたようだった。つまりのところ、彼女の心の内に対象との‘距離’が出来てきて、それらがようやく視界に納まったともいえよう。帰属意識(a sense of belongingness)もまた・・。玩具の箱に自分の名前が書かれてあるのを見て、<これはわたしの、そういうことよね>と喜ぶ。「次回 next-time」という言葉も知り、セッションも「われわれのセッション our session」になってきた。そしてどうやら彼女をコンティンし得るだけの‘レジリアンス’がわたしにも備わってゆくようだった。だがその一方で、セッションとセッションの合い間、特に週末だが、何を自分が失っているのかということに強烈に意識が向き始めた。すなわち、「不在の Miss Yamagami」ということ。それは彼女に多くの痛みをもたらした。この痛みこそがまさに彼女に自己を意識させるものでもあったわけだが・・。彼女はわたしに噛み付かんばかりに吠える。<先生の顔なんか見たくもないわ。何さ、クソみたいなもんじゃないのさ>と・・。もしくは<わたしが怪我しようと何しようと、全然気にも留めないでしょうよ>とあてつけがましい厭味を言う。でもそれを言いながらも、彼女はいかにも傷ついたふうに見えた。それでわたしに向かって<あっちへ行け！(Go away)>という言葉が頻出した(1978/02/10)。彼女はかくして、わたしに向かって口汚く罵倒し、せいっぱい底意地の悪さをあらわにした。わたしという存在がそれほどまでに彼女の神経を逆撫でし、辛い思いにさせるからだということで、勿論彼女にしてみれば、それは正当な‘報復’ということになりましょう。セッションとセッションの間(溝)、そのわけの分からない‘迷路’に嵌ったかのように彼女がどれほど激しくもだえ苦しもうと、わたしは彼女にどのような意味でも手を差しのべるわけではなく、ただじっと待つだけなのだから、彼女にしてみれば、わたしは実に‘残酷’ということになる。確かにそうでありましょう。そこで何よりも彼女の攻撃の標的とされたのは、わたしが彼女に語りかける「解釈能力」。すなわちそれというもの、「わたしの舌 tongue=言語=父親ペニス」なのだが・・。彼女は耳を両手で覆い、<何も聞こえないからね。わたしはツンポだもん。・・わたしは黙っていたいの。おまえなんか臭い臭いウンコじゃないのさ・・>と言った具合に、敵愾心をあらわにして悪態を付くなり、叱責するなど大いに嘲笑的となり、一度はわたしの口を「糊のりのついた色紙」で覆い、話ができないようにと‘口封じ’を試みたりするのであった(1978/02/06)。そのように、わたしの元へと毎回戻ってくるのがどれほど困難を極め、絶望をもしば

しば味わわざるを得ないことになるかということは、彼女の書き綴った文章に色濃く表れております(1978/02/16)。「The boat went down the stream. It was the Queen—Mary going to Noway」。この場合、本来「クウィーン・メアリー号」なる船の行き先はノルウエー(Norway)なのだが、彼女の綴りには r が紛失しており、結果的に‘行き先がない Noway’ということになってしまう！つまりのところ、寄る辺なくどこか見知らぬところに捨て置かれるといったふうな、放逐(追放)の恐怖でありましょう。

そして最初の彼女の復活祭のホリデーが近付いたとき、彼女は想像の遊びで‘病んだ子ども’ということになり、病院に収容されます。彼女は看護婦さんに「眠り薬」をねだります。そして「目覚める薬」もまた…。つまりのところ、もしも「眠り姫 Sleeping Beauty」みたいに、ホリデーの間眠り薬で眠らせられていれば、ホリデーとか‘セッションがない’などといったことをまったく感じることも(知ることも)なく、それで彼女が目覚めたときにはくもう次のセッションがある！>、そうしたことが意味されていたといえましょう！なかなか巧妙な仕掛けではありますが、しかし彼女はそれも確かとは思えないわけです。彼女の目の前に大きな洞穴が待ち構えており、そこにはからだ^が吸い込まれて落下してゆくといった感覚が実にリアルであったわけです。そしてその‘罨’(抑うつ感＝深刻な病い＝死)に嵌ったまま脱け出せず、いつそこから救出されるものやら、彼女としてはまるで疑わしいのであり、悲愴感に取り憑かれておりました。

そして復活祭のホリデーを迎えたのです。2週間ほどの長いセッションのお休みは初めて。その直前のセッションにおいて、彼女は‘ありとあらゆる万病(the known and unknown illness)に効く薬’というものを自前で考案します(1978/03/22)。彼女の処方した‘薬’とは、瓶のなかの水に赤いチョークで色を付けたもの。瓶からその薬を壁に振り掛けます。そして床にも撒き散らします。赤い色でしたから、部屋中どこもかしこもまるで‘血だらけ’といった状況になったわけです。いかにもわたしは「メアリー・吸血鬼」に全身の血を吸い取られているような気分で震撼させられたのです。そしてどうやらわたしはまさに息も耐えんばかり、心臓発作寸前といったことのようなのでした。わたしがホリデーで不在になるということは‘死’を意味したのでしょうか。わたしの身に何が起こるか分かりませんし、当然他の誰かの邪魔が入ることも、そして強奪されることだって想定されなくもありません。だからその前にありつたものを吸い取らんとしたというわけでしょうか。かくしてメアリーはわたしとの「喪の儀式」を司っていたことにもなりましょう。でもこれもちょっと見方を変えれば、それはいかにも彼女の‘出産 birth’が再演されたもののようなのでした。つまり、わたしとの‘分離’というこの事態において、かくも痛みを伴うことをあらわにしたというわけです。それはただ永久的に‘落下 drop’して、あつけなくも地の果てへと追いやられるといったことでしかないかのように…。つまりは出産時に於ける拭い^ぬくようなない心的外傷。致命的な打撃そして絶望を回避せんがために彼女は遮二無二抗っていたともいえましょう。メアリーほど母親の胎内に留まり続けたいと願った子どもはいなからうと思わせるほどです。母胎との一体感の希求は執拗極まりない。それこそがパラダイスであり、彼女にとってこの世に生まれることはとことん「失樂園 Paradise Lost」でしかなかったのでしょうか。

ホリデーから戻ってきたメアリーは(1978/04/10)、まるっきりぼろぼろに擦り切れた‘テディベア’みたいでした。その疲弊したさまはギョッとするような光景でした。彼女はホリデーの間に風邪を引いたとのことでした。まだ鼻風邪だったり、唇がひりひり痛んだりするとのことでした。それで彼女はセッション中にまるで腑抜けたふうに鼻をほじることをしておりました。彼女はその後の2回のセッション指吸いをしながらうとうと眠りこけ、それからどうにか‘墓の下に埋められた’かのような抑うつ感から回復したわけなのでした。そして目覚めたのはいいのですが、わたしの「新しい子ども」に対する‘殺人的願望’が猛然と湧き起こってきたのでした。そして彼女は、勢い込んですべてを擲げんと試みます。＜あなたのその‘臭い臭い’赤ちゃんを欲しければどうぞどうぞ・・＞といったふうにならぬ。そして彼女自身がまさに‘それ’になったかのように部屋中が‘オシッコで濡れたおしめ’でどこもかしこもいっぱいといったふうでした(ありったけの紙タオルを水でどっぷり濡らし、ちぎれちぎれにし、そしてそれらは部屋中あちこちに撒き散らされたというわけです。)彼女流の「シニシズム」、それというのはもしもわたしが彼女を‘内側’に抱え続けておれば‘天使’のような彼女でいたはずなのに、わたしが彼女を‘外側の子ども’にしたお蔭で、その報いがこれというわけです。それでセッションがまさに地獄のようなものになったとしても、それってあなたのせいでしょうといったこと！ そんなふうにならぬにわたしを懲らしめ、冷笑的に皮肉を浴びせていたことになりましょう。

或る日のこと(1978/04/24)、彼女は語りました。＜わたし、地下牢にいたことがあったの。1968年頃。わたしは4歳だったかしら・・。寒くて凍えそう。真っ暗なの。そして辺りは人骨がいっぱい。それらは昔昔の人達の骨なわけ・・＞。そしてすぐさま彼女は皇室の王女さまになります。18歳です。まだ結婚はしていません。しかし彼女は誰かに恋心を抱いております。恐らくね。絶対そう・・。メアリーはここで「アレクザンドラ王子」を想像しました。メアリーに恋したのです。そこで彼らは結婚したいと願います。しかし王様から許可を得ることが出来ません。そこで王様の留守の間に、秘密裏に結婚することにしたのです。両者は並んで腰掛けております。そしてお喋りしております。＜わたしは18歳よ。あなたも？ あらまあ、じゃあ、わたしたちって双子ってわけね＞と彼女は大いに喜びます。そして彼らの‘結婚式’が終わるやいなや、＜あつ、痛い＞と一言言うとお腹を両手で抱えます。＜わたし妊娠したみたいよ。ママ！ 病院に電話してちょうだい・・＞と言います。それから引き続き、赤ちゃんを分娩するといった過程を克明に彼女は自作自演します。つまりのところ、「‘自力でやる’式の分娩」でありまして、やがて間もなく彼女は自分の腕のなかに‘赤ちゃん’を抱えたという次第でした。こうした夢想は、メアリーの身になってみれば、実に彼女が夜独りぼっちで眠る間に感じるころの耐え難い孤独感(死の衝動)にどうにか耐えようとする彼女のやり方だということになりましょう。彼女にとって自分を一人ぼっちにしないで一緒にいてくれる誰か何かをどんなに願ったかということ。それが彼女自身のお尻から漏れ出る‘尿’だったり‘ウンチ’であっても全然構わないわけです。構わないどころか、それこそ‘自前(!)’でいつでも自在に彼女にとってモノにできるものなのですから、それ以外のものは考えられないほどに好都合といったことになりまふ。たぶんこれこそが彼女の場合「排泄訓練」がそれほどにとんでもなく遅れていたことの真の理由ではなかったでしょうか。彼女は学校にあがる前のナーサリーでも、そして学校にあがって以降も日中にしばしば尿失禁がありました。排泄訓練というのは、彼女にとっては実に‘脅威’でしかなかったのです。尿やらウンチのあったかさを奪われることは、つまりはかつての独りぼっちという‘地

下牢’の凍える寒さに舞い戻ることを意味していたのでしょう。彼女は自分の排泄物にとことんしがみついていたわけです。それは彼女の感情からすれば、生存上絶対に必要不可欠なものであったわけです。しかしながら、それがため一事が万事、規制(制限)の摂り入れが困難となり、それが彼女の無益な反抗心とせめぎあう結果となったわけです。このことが、セッションでも大きな躓きとなりました。わたしは彼女を「あまのじゃくのメアリー (contrary-Mary)」を呼んでおりました。彼女は何にも反対(アンチ)を唱えるかのようでした。テーブルをひっくり返してはそこに陣取るやら、部屋中を水浸しにするやら、あちこちに粘土やら紙くずなどを撒き散らす。そしてすぐにカンシャクを起こしては喚き散らし、そしてわたしに対して身体的に暴力を振るうといったこともありました。そして折々にくふん、わたしの知ったことか！>といった態度で無頓着を装い、セッションの途中で退室することすら起こったわけです。

そして1978年の5月頃に至って、どうにか自分をコンティンすることができるようになり、彼女の‘お尻’に気を奪われていたのが、どうにかそれほどでもなくなってまいります。頑固さやら反抗的であったりしたのがいくらか減ってゆき、少しずつ気持ちが穏やかになってまいりました。例えば、ある時(1978/05/05)彼女はたまたまセラピールームの中で1匹のてんとう虫を見つけました。それを手で掴んで腕に這わせます。そして嬉しそうな声音で、<ほら、彼はわたしの皮膚が好きみたい。外が嫌いなのよね。..そういえば、これ前見たことがあったわ。お家で..。羽が壊れてしまっていて、それでわたしが直してあげたの。それから葉っぱの上に戻してあげたの。もう彼は2歳だわね。去年見たとき彼は1歳だったはずだから..>と語りました。それから、彼女は真っ当な方向へ向けて頑張ろうとする兆しが見えてきました。例えば、セッションのなかで彼女は日光浴をしておりました。彼女は自分がビタミンBを必要だということを考えついたのです。<日光って人々を健康にするのよね>と言いながら..。しかしすぐさまその後で<アッチー>と言い、少し離れた部屋の隅へと避難しなくてはなりませんでした。そこには「救急コーナー」があり、それは万が一誰かが日焼けして痛がったりした場合に備えてのことなのだ、彼女は説明しました。確かに、あまりにも多くを貪欲に欲しがることはヤバイことなのです。彼女が希求せんとするものを手にできない場合には心が傷ついたりヒリヒリしたりするからです。彼女は世界で何が起きているのかを知るのに新聞を覗いてみるんだそうです。外国ではとんでもない深刻な事態が起きていることを知ります。例えば<入獄されるの。それで耳を切り落とされるってわけ..。変な具合になるわね。聴けなくもないけど..。だけど、耳がないっておかしいって人に笑われるでしょ..>といったこと(1978/05/11)。明らかに、ここで彼女は5月に予定されているバンクホリデーでセッションがお休みになること、つまりわたしからの語りかけ、彼女を‘大きく賢くしてくれる養いのことばたち feeding-words’が無くなること(耳=口の剥奪感)を意味していたのでしょう。しかしながら、彼女はかつてナーサリーでジャングルジムで遊んだことを思い出したのです。<あのね、わたし落ちたのよ。それでからだをぶつけたの。すごく痛かったわ。でもかすり傷一つなかったわ。..でも、それでジャングルジムで遊ぶのを止めはしなかったの。それから何百回も上ったわ..>ということでした、そしてさらに夢見るふうに語ります。<わたし、山登りするわ。探索するって好きだもの。動物を見たりするのもね。それで洞窟を発見したりするの。それで鉛筆と紙を用意して、メモを取るってわけ..>。この時点で、わたしとしてはどうやらメアリーにとって真っ当な未来が期待されようとしていいると信じられたのです。確かに彼女は心のなかに色ん

なものを取り込み、それらについて観察し、もしくは熟慮するといったことの可能性へ向けて前向きになろうとしているといったふうに見えました。それから彼女自身の‘自己’というものについても幾らか把握されつつあるともいえそうです。＜そう、実際のところ、わたしにはフィーリング(感情)があると言えるわね。他の人びとに対してのフィーリングということだけど・・＞と、彼女は語っています(1978/05/11)。

ここで彼女の心の内である疑問が湧き出します。すなわち、自分は善良であるか、賢いか、もしくは何かしら創造できかつ有能であり得るかどうかといったこと。自分がしくじるのではないかといった懸念は彼女の場合にはとても強かったのです。不妊 infertility、もしくは流産 miscarriage とかいったこと。彼女は母親に同一化しています。＜お母さんはね、もう一人子どもが欲しかったけど、出来なかったの。わたしは弟とか妹が欲しかったんだけどね。でも赤ちゃんを孕め^{はら}なかったわけ。卵子と精子とを一緒にするということがね・・。だから産むことが・・＞と、彼女は語っております(1978/05/12)。そしてここで どうやらわたしの‘ヴァギナ’がある意味‘多産・受精力 fertility’のシンボルとして意味され、それで彼女の羨望的な攻撃欲的になっていたということが言えます。それはまだ彼女の知るところでは無く、遠く隔てられていたがゆえに、わたしが抱えるこうした‘秘密’がとても耐えられないのでした。それで彼女はわれわれの関係性を逆転させんと躍起になることがあったのです。わたしが座る肘掛け椅子を横取りして居座ろうとしたり・・。それから、＜他人のことにいちいちあてもないこうでもないって嗅ぎまわるの、止めてよね・・＞と高飛車にわたしを牽制したり・・。こうした彼女の‘スツタモンダ’を眺めながら、わたしは彼女がトイレに閉じこもり、自分の肛門が産み出すものでからだを汚しているのではないかとふと思うことがありました。それでわたしの‘ヴァギナ’が産み出すものと張り合っている具合に・・。

彼女は時として極度に侵襲的でした。例えば、メアリーは想像の遊びで‘靴の修理屋さん’になりました。わたしの靴を脱がせて、＜ほらね、破れているでしょ。修理しなくちゃ・・＞と言う。それからしばらくしてからそれを持ってきて、わたしにそれらの靴をわざと左右反対向きにして履かせたり・・。実は彼女はわたしが履いている靴に執心し、よく触りたがりました。ここで、靴がわたしの‘ヴァギナ’を象徴していたのは確かのようなのです。つまりのところ、ここで‘あまのじゃく(contrary)メアリー’がわたしの‘ヴァギナ’を我がものにせんと躍起になっていたといえましょう。さらには、メアリーは‘宝石デザイナー’になりました。わたしの腕にブレスレットをつけ、そしてわたしの指に指輪を嵌め、そしてわたしの首にネックレスを掛けます。それで、わたしはいかにも鎖でがんじがらめにされたといった感じなのでした(1978/05/30&31)。そして事実、このことはわたしの「性愛」に対して意図的な操作を試みたということでもあります。恰もこの時点でわたしは金縛り(もしくはフリーズ)状態にさせられたという意味で・・。もしくは時として彼女は「サディスティックな鞭打ちのペニス」となります。彼女は足をわたしの座っていた椅子の下からグイと蹴り上げました。つまりのところ、そうしてわたしの‘ヴァギナ’に損傷を与えるといったことのようなのでした。彼女の敵愾心および羨望の矛先は、わたしの‘他の子どもたち’にも向けられます。例えば、＜Miss Yamagami, 教えて！わたしのセッションの前に来る子どもは、男の子なの？女の子なの？何ていう名前？教えてちょうだい。わたし何もしないって約束するから・・ね＞と・・(1978/06/11)。或いは、＜先生はいつも何だかせかせか急いでるって感じよね。でしょ？＞と言いながら、いかにも軽蔑のまなざしを

向けるといったふうに・・・(1978/07/06)。ここでメアリーは田舎の風景を絵に描きます。<ほらね、太陽でしょ。水の流れ、岸辺そして樹木がある。田舎がどんな雰囲気なのかを描いたのよ・・・>とのことだったが、それを描いた後、その画用紙をまるで洗濯物を干すみたいに綱にそれをぶら下げた。そしてここにわたしが夏のホリデーの間に十分な休息を取ることが意図されていたように思われます。或る意味で彼女の良き‘思いやり((concern)’ (!)といったこと。なぜなら彼女はわたしについて、たくさんの子どもの世話に追われ、‘あまりにも忙しく、それで‘消耗している母親’といった具合にいくらか気にかけて始めていたのは明らかと思われます。しかしながら、彼女はそれ以上考えることはしたくないふうでした。彼女はしばしば<これはわたしのこと、あなたの関知するところではない(This is my business, this is not your business)>ということを高飛車に言うのであった。それはこの夏のホリデーを間近にして、メアリーとわたしの間にできた‘障壁 barrier’に直面し、その‘分離 separation’に備えて、挫けてたまるか負けてたまるかといったふうに、いっそうタフであることの構えを崩そうといたしません。時には<あんなんか、大嫌い！大嫌い！(I hate you)！>と怒鳴りまくるといったこともありました。それでややもすると激昂して爪を立ててわたしに襲い掛かるということも・・・彼女の言い分というのは、<先生に痛い思いをさせてやるわ。だって、先生はわたしを痛い思いさせるじゃないのさ。苦しめるんだもの(I want you hurt! You hurt me! Sting!)>というわけだったのです(1978/07/14)。ところが、事実として、メアリーはどんなにセッションで荒れ狂ったとしても、次のセッションに来るのを嫌がることは決してなかったのです。毎回どちらかという待ち構えたふうな面持ちで現れ、ハロー！とわたしに機嫌よく挨拶するのです。何とも可笑的いやら、時にわたくしとしては微妙な心境になることがありました。それで、セッションに入るや否や、またまた何かの拍子に「大嫌い(I hate you)」が始まるのでしたけれど・・・。

ここで一つの転機が訪れます。契機は風疹に掛かったことと、もう一つは彼女が飼っているモルモットに赤ちゃんが3匹産まれたことです。妊婦が風疹に^{かか}罹ると胎児は死産するからと、彼女は自分がその感染経路になることを極度に恐れる。何しろ今や彼女は、モルモットの赤ちゃんたちそれぞれの名付け親(god-mother)なのです。それに動物愛護者(animal-lover)であることを自認していたわけなので、それでも尚、時折きまぐれな‘魔女の猫 witch-cat のメアリー’がすべて台無しにしかねないのです。彼女は、わたしが着ていたスモックの下に隠れていたネックレスを目敏く見つけ、グイと引っ張り出し、手にしたペンダントの石をいじくる。どうやらわたしの‘内なる赤ちゃん’に風疹をうつす意図がうかがえた。すなわち‘両親の性交’への侵入的好奇心があらわになっていたのです。でも彼女は紙切れを耳に突っ込み耳栓をし、それら剣呑なことは断固聞かまいとします。でも罪償感^は明白。そして再び地獄落ちの悪夢が蘇るのです。ここでダークサイド(暗黒面)に墜ちてゆくダース・ベイダー(映画『スター・ウォーズ』)に同一化し、メアリーは「コンタクト！(接触、すなわち応答願います！の謂い)」の呼び掛けを沈鬱な声で闇に向かって無機的に何度も繰り返すのでした(1978/07/25)。事実、夏のホリデーは間近であり、彼女はどうしたらセッションのない4週間という長いお休みに耐えられるかと不安な気持ちで大いに苛立っていました。それでセッションを中座してトイレに逃げ込むといった時間稼ぎもあつたり・・・。つまりのところ、わたしからの‘呼び掛け’をどれほど希求しようとも、「あまのじゃくのメアリー

(Contrary Mary)」が邪魔し、わたしの声の届かない深い奈落の闇底に逃げ込むといったところでしょうか。

そして俄然‘現実’を悟るということになりました！それもセッションの曜日を木曜日と勘違いしていて、まだ水曜日だと知ったことがその契機なのですが。つまりあともう一回のセッションのつもりが事実あともう2回のセッションがあると知ったということ。これが彼女をひどく喜ばせます。＜(頭のなかで)想うことと(実際に現実を現実として)知ることは違うのよね(Thinking is different from Knowing, isn't it)？！＞と、彼女は語る。そして突如、現実志向となる。差し当たりアイルランドへの家族旅行。＜そうよ、そうだわ。アイルランドで休暇を過ごすのよね。それって単にわたしが想っていることじゃなくてね(I know, I know, I'm going to holiday to Ireland, not just I thought！)＞というわけです。そして持参する必要なもののリスト・アップを作成した。2週間もの旅行だから、結構あれもこれもということになる。タオルやら石鹸、それに歯ブラシも…。その際にスプリング(語の綴り)に意欲を示す。規則・規範への順応の第一歩といえましょう。綴りの一字一字がいわば‘赤ん坊’。それで誰も迷子にならない、誰も順番を乱さない。調和そして秩序への回復へ向けて、‘ブラウニーのメアリー’はここで張り切って整理整頓(tidy up)に忙殺されます。〔註；「ブラウニー」とは、ガールガイドの見習いの幼年団員のこと。〕 どうかやら来学期には、家庭教師の先生(Mr. H)を週一回迎えるらしい。彼女が言うにはもっと字をきちんと書けるように(tiding up my messy writing)ということだった。道理で！それに、確かにメアリーが全体に身奇麗(tidy)になってきていたのも事実。船酔いが心配だとか言いながらも、アイルランドの地に赴き、家族で過ごす牧場で動物たちに出会うことを楽しみにもしていたり…。来るべきホリデーに備えてどうにか心準備は出来たかのようだった。

そして休み直前のセッション(1978/08/05)に、なんと彼女は冬支度の完全武装で現れた。分厚い毛糸のポンチョを身に纏い、毛糸のマフラーを首に巻いてといたいでたちであった。(真夏の真っ只中に！)そして彼女はまた、両手にいっぱいの本を抱えていた。漫画本とオックスフォード詩歌字典を小脇に抱えて…。口の中でガムを噛んでいる。‘自給自足体制’ということでしょうか。彼女の‘飢えた赤ん坊’を宥めるためにこれらのものが必要だったということのようです。セッションのない‘飢餓感’を埋め合わせするために…。(剥奪感、つまりわたしが語りかけることばが与えられないということだが)。真に彼女にしてみれば、<もう頭きりきり舞いだわ、どうにかなりそう…(I scream my head off！)>という言葉をつい漏らしたりもしたが、どうにか爆発せずに踏ん張った。それはセッションの進展としての証とも言えよう。かつての復活祭のホリデーの際のように、涙と濡れたおしめのままで凍える外に捨て置かれる‘外側の赤ん坊’として打ちひしがれる彼女ではもはやない。何とか持ち堪えようとする大きな女の子(a competent big girl)のメアリーになっていたと言えよう！事実、ポンチョを脱いだ彼女は、新調した可愛い夏の半袖の服を着ていたし、白い清潔そうなパンティも履いていた…！

夏のホリデーから戻ってきたとき(1978/09/04)、彼女は「マザー・ケア」の小冊子を携えていました！ページを繰りながら、販売リストを眺めて、自分がつい先日購入したオーバーコートの話をしませす。＜冬の

ものよ。ちょっと大きいけど、でもいつか私も大きくなるからちょうどよくなるわ(・it's a bit big. But I'm growing into it)といったところ。。彼女はどうか「外側の子ども」であろうと、充分その気になっていたようでしたし、それに、どうかわたしのなかに「新しい赤ん坊」のためのスペースを残してやろうとも考えているみたいなのです。確かに彼女も今ようやく「潜在期」の域に達したかのようです。彼女は自分のことを自分でやる気が出てきました。それにブラウニーの「お手伝い」のバッジをもらうためですが、家中の片付けのお手伝いもするし、お母さんに勧められてお風呂に入ったときに初めて自分の靴下やらパンティの洗濯もしたんだとか。ちょっと変な気がした。。そんなことも語ってます(1978/09/19)。彼女の気分は概して落ち着いて、穏やかになっていったのです。そして彼女は幾つか興味を持てるものが増えつつありました。ブラウニーの活動の他にもバレエレッスンとか。しかしながら同時に、彼女はちょっと尊大さ(偽自立性 pseudo-independency)が募ってゆくようでした。そして俄然わたしに対して支配的となろうとし、彼女自身の「赤ちゃんの部分」に対して敢えて逆らうかのようなのです。例えば、彼女はこんな文章を書いています(1978/09/21)。<お母さんそしてお父さんへ。わたしはクリニックに絶対に行きませんから。。愛を込めて。メアリーより>といったふうに。。それやら、わたしに対して揶揄するような批判、<先生はユーモアのセンスがないわね。わたしはあるわよ>と言ったり。。そしてしばしばメアリーはわたしに向かって、<黙っててよ。。ああじゃこうじゃ言わないで。。>とも。それは恰も<もう赤ちゃんじゃないんだから、赤ちゃんみたいにしないでいいんだからね(No more feeding baby) ! >といったことのように。彼女の孤独であることを自覚すること、それはすなわち彼女の口が空っぽであること、そして彼女の「ヴァギナ」が空っぽであること、それは彼女にしてみれば、ひどく感情が強張り、そして苦々しいものでありました。それはわたしの「夫 husband」との関係性というものにひどく好奇心を募らせていたせいです(この文脈では、お乳＝言葉＝精子 semen といったことになりましょう)。彼女は怒鳴りまくりです。<わたしが週末には地獄行きなの決ってるじゃないの。なにさ、おまえさんの尻とは違うわよ(I'll go to Hell at the week-ends. Shut your bum!) > (1978/09/25)。この「夫なるもの」、すなわち「母親オッパイ」に君臨する「父親ペニス」との競合は苛烈になってまいります。彼女は、セッションでここを「仕切る」のは自分だということを懸命に主張せざるを得ないのです。‘権威’に楯突くアナキズムであります。それで‘両親の性交’を真似て、わたしの座る椅子の下に潜り込んだり、足で蹴り上げて椅子をひっくりかえしてはそこに陣取ったり。。或る日(1978/10/24)などは、彼女は長い小枝を手に1本持ってきたのですが、それでテーブルの下に潜り込んでその小枝で‘くすぐる tickling’やら、床に這いずり回っては部屋中の壁を叩きまくるやら。。レスビアン的なサディズムでもありそうですが、まったくのところ‘男の子メアリー’「リトル・エディプス」が敵対する「父親ペニス」の侵入を阻まんと躍起になって奮戦していたともいえましょう。「男の子メアリー」などと言えば、<わたしは女の子だあ！>と烈火のごとく怒りまくるのでしたが。。さらにはそれが高じて、鞭打つかのように、その小枝を振り上げてわたしに向かってまいります。ここには「悪魔的 demon 父親ペニス」の取り込み同一化がうかがわれるわけですが、それも‘母親の内なる子どもたち’を殲滅せんがためであります。それで迫害意識が募ると、さっさとトイレに駆け込み、手っ取り早くそれを‘排泄’する。そうしたことがごくごく頻繁でありました。それで廊下の電気のスイッチを消したり点けたり、プレイルームの扉に掛けられたプレートを「Vacant(空き室)」にしたり「Engaged(面接中)」にしたり、気儘に時間稼ぎして5分ほどして戻ってくるのですが。。

‘内なる燃え^{たぎ}滾る尿’（尿道愛的サディズム）を排泄した後だからか、毎回トイレから戻った彼女はすっきりと穏やかになります。

しかしながら、メアリーの心のなかでMiss Yamagamiのたくさん子どもたちのいる家族といったイメージが頭を過ぎるに及んで、彼女は自分がわたしの心の中で片隅に追いやられてしまい、そして容易に忘れられることを恐れてもいたのであります。それで、彼女はわたしに一枚の紙切れを手渡します。そこには彼女の名前、年齢、そして住所と自宅電話番号が書かれてありました。くもしものとき、わたしが迷子になったりしたら、これ要るでしょ>というわけ。でもそこにはくあなたへ(To You)>ともご丁寧^{ていねい}に書かれてありましたから、わたしに向けての「忘れないで」というメッセージでもありましょう。そして彼女は、「Musical chairs」(椅子取りゲーム)を演出しながら、‘他の子どもたち’と競い合うことに懸命になっておりました。自分だけが一人置き去りにされることはいやだという思いが彼女の背中を押していたのです(1978/10/13)。そしてこの時期、彼女は両親と供だつて出掛けることを喜ぶようになってまいりました。特に母親と…。例えば乗馬のレッスンとか、博物館やら、コンサートやらも…。

それに、どうやら父親との関係性にもここに至って幾らか変化がありそうです。事実、セッションのなかで「慈愛深い父親ペニス」と「邪悪なる父親ペニス」の対比が彼女の念頭に上ってまいりました。それは彼女の空想(1978/10/03)では、「救世軍 Salvation Army」ではなくて、それを諧謔的に風刺した「飢餓軍団 Starvation Army」といったことになります。そこでは人々は飢餓ゆえに死に絶えるしかないというわけ。そしてメアリーこそがその犠牲者の一人であることを名乗ります。それで彼女は、その飢餓軍団の‘お尻のキッチン kitchen-bottom’で真夜中にこっそりと‘ウンチ・ケーキ’をこしらえ、我が物顔にそれらを貪り食うわけです。それもどうやらわたしの体内に隠し持っているものへの羨望 envy がもたらす「自慰空想 masturbation-phantasy」といえましょう。特に彼女のいうところの「Daddy Willy(パパのおちんちん)」に大いに魅せられてもいたのです。それこそがわたしのなかに‘言葉=精子 sperm-babies’もたらすところの「父親ペニス The Daddy-tongue-penis」なわけです。彼女は疎外されていると感じており、なんとしても気を引こうと発奮するわけです。或る時、彼女は流し台で‘ストリップショー’を演じておりました。お尻を振り振りさせながら…。それから裸のまま窓際へと近寄り、外の駐車場の車の中の‘誰かさん’にちらちらと流し目を使ったりといったことがありました。最後には何食わぬ顔をしてきちんと持参してきたブラウニーの制服に着替えるのですが…。実はセッション中、彼女はしばしばわたしに向けて人差し指と中指で「V サイン」を作って突き出す素振りを示すことがありました。それはく黙れ！>という威嚇の意味でもありますが、‘邪悪なる父親ペニス’を取り込んだ、彼女の自慰空想において両親の性交にこっそりと忍び込む‘侵入的なペニス=指’ということになりましょう。そして、或る時(1978/10/06)、セッション中彼女は扉に指を挟んでひどく傷つけてしまったことがあります。それがまったくのところ故意の事故であり、自傷行為なのは明らかでした。どうやら性愛が募ってゆくことに危機意識があったことは事実でしょう。それで現実的に、彼女が慰撫されるための誰かとして「慈愛的な父親ペニス」がここで希求されるに至ったもようです。そして或る時、セッションの外でわたしはたまたまこんな場面を目撃しました。彼女が玄関口でタクシーを待つ間にからだを父親の両腕に抱きかかえられて、

天井に手を伸ばしている姿です。天井に届くかどうかということらしいのですが。まるっきり‘高い高い’をパパにしてもらってキャキャと喜ぶ赤ちゃんみたいです。どうやら二人の関係はかつてのよそよそしいものではもはやなくなっているようでした！

しかしながら、彼女が「大きな女の子(お姉ちゃん)」のメアリーになればなるほど、彼女のなかでアンタゴニズム(自家撞着)は募ってまいりました。つまり「母親オツパイ」を断念し‘巣立ち’をすること、そして新たにお相手を見つけること。つまりのところ、もはや親ではない、自分の‘連れ mate’の誰かを希求することが切実になってまいります。実際のところ、メアリーは見た目がぐんと可愛らしくなってきました。それは以前よりも自分の外見に気を使うようになってきたからでしょう。そして学校で男の子に人気があるかどうか意識するようになっておりました。例えば「Wild-Geese game」といった遊戯ですが、それは男の子と女の子の間でのちょっとした性愛的ともいえる、互いを誘う駆け引きだったりするわけで…。しかし、そもそも彼女には可愛い女の子としての自信がありません。‘臭い臭いメアリー！’とかつて男の子らにはやされ、いじめられた過去の記憶もあり、それが足を引っ張るわけなのでした。それで彼女はそうした性愛的な事柄のすべてを断固頭から追い払おうとします。例えば、男子の学校と女子の学校が壁で区切られているとか、男子のトイレそして女子のトイレは別々であるとか、そのように男女は決して混じり合うことはないといったふうに…(1978/11/13)。この時期にちょっとした不運ともいえる出来事が彼女の身に降りかかりました。路上で犬に噛まれたというのです。彼女はそれをわたしに語り、ぐいとパンティを引き下げて、自分のお臍の辺りをわたしに見せようとしたわけですが、なんと性器の辺りを指差しておりました！彼女が履いていたスコッチ・スカートのスリットから犬が首を突っ込んできたということでした。それも何だか腑に落ちません。まるでスカートのスリットとは彼女の性器の‘割れ目’を言ってるようでもあります。事實は、まず彼女の方から犬に身を屈めて手を出したということらしいのですが。それで噛まれたかどうか、どうにも事の真偽が疑われます。まるで彼女は強姦にあったみたいに印象づけようとしておりました！‘幼い売春婦メアリー’が路上に立って客の男たちに媚びそして誘うといったこと(邪悪なるペニス=犬)を想像して、どうやら性交というものが危険であり、ここに至っては‘悪’でしかないものと決め付けざるを得ないことになったようでもあります。どうやらここで「脱性愛化 desexualization」へと舵取りしてゆこうとする動きが見られました。この頃に描かれた彼女の絵はそうした心の内の葛藤の成果と言えましょう(1978/12/04)。丘の上のお家の絵です。玄関には呼び鈴そしてノッカーがあって、居間には暖炉があり、5人分のくつろげる椅子、それから TV も…。両親と子どもら3人にはそれぞれ別々の寝室があります！他にバスルーム、それに勿論トイレも…。興味深いのは



彼女がそれぞれを区分する‘仕切り bar’を強調したことです！どうにか秩序は回復されたもようです。さらに、お家の隣に山を描き、家族全員がウオーキングに出掛ける様子が描かれます。どうやら‘お姉ちゃんのメアリー’が弟そして妹を率いているようです。意気軒高さがしのばれました。そしてその後、彼女は紙細工ということであれこれ試みながら、ふと或る興味深いことを語りました。それはいつかどこかで「人々

が輪になって手と手を繋いでいる」、そんな切り絵細工を見たことがあるんだけど、実際にどうやったら自分がそれを作れるのか知らないと・・。＜それが問題なの(that's a problem)・・＞とのことでした。まったくのところ彼女が頭を悩ますのも道理。日頃一人っ子の彼女にしてみれば、誰一人除け者にならない、そして誰一人除け者にならないといった「家庭内調和」の問題は、まだまだ担いきれない課題なのでありましょう。「親たちというカップル couple」への妬ましがどうしても邪魔するようでした。

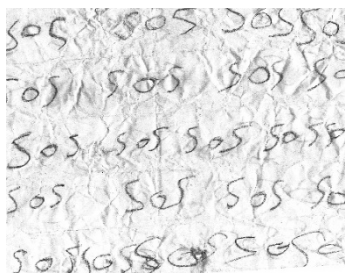
そして、クリスマス休暇が近付きにつれ、彼女はセッションのなかでしばしば「孤児物語」を繰り広げます。そこでは彼女はいかにも浮浪児みただったり、そして売春婦のようだったりするわけでした。例えば、彼女の文章「Mr. Bump(ミスター・尻男)」がそうでした。彼女はセッションのなかでミンチ・パイをなんと5個もムシャムシャと口にほおぼっておりまして！とんでもない食欲な口(=ヴァギナ)というわけです！そしてここでその‘ミスター・尻男’をグロテスクな「黄色い怪物」に仕立て、彼女自身敢えてそれに扮し、ありっけ‘香水’を振り掛け、顔にあれやこれやの色を塗りたくってメーキャップします。そこにはこれみよがしの皮肉的かつ冷笑的な性質がうかがわれました。つまり彼女自身がわたしに対しての「邪悪なるペニス」そのものに化身し、敢えて^{おとし}貶め侮辱しているわけです。(すなわち、わたしの‘野蛮で醜悪な夫’というわけでしょうか？！)彼女はわたしが座っていた肘掛椅子に安全ピンを突き刺すことをしております(1978/12/18)。事実、彼女は「クリスマス・ベイビー」の誕生を気に揉んでいたのです。そこで彼女自らがドクターとなってわたしが妊娠していないかどうか検査するということになりました(1978/12/20)。Dr.メアリーは妊婦の検診のときのように、まずは舌を出してみたとわたしに命じます。口の中に病原菌とか何らかの危険なものがないかどうかを調べるからと彼女は言うのです。それからハサミを手にし、その取っ手の丸い輪(拡大鏡のつもり?)からわたしのからだのあちこちを覗こうとします。天然痘にかかってはいないか、熱病ではないか、どうも頬が赤いとやら・・。彼女は自宅で飼っているペットの雌のギニーピッグについてその妊娠徴候を知っておりましたから、是が非でもわたしの‘ヴァギナ’を覗き込んでみたかったのです！赤く腫れていないかどうかです！それでわたしの履いていたブーツのサイズを測ろうとします。それで靴紐がどうもうまくない。きつくて痛くはないかと尋ね、アクションを起こそうとします。飽くまでもわたしの‘ブーツ=‘ヴァギナ’の中を覗き込むことに執心します。彼女の魂胆は、もしもわたしの‘ヴァギナ(=ブーツ)’が少しでも緩んで膨らんでもいれば、それは‘妊婦’の兆候ですから(!)、即座に Dr.メアリーは執刀医となり、それを閉じてしまおうと意気込んでいるかのようでした！その執拗なこと！いかにも彼女はその考えに取り憑かれているふうでした。それから靴紐を解こうとしたのをわたしに止められ、しばしわたしの周りをうろついておりましたが、いかにも悔し紛れに手にしていたハサミでわたしのブーツに一撃を加えたというわけです。こうして靴はわたしの‘ヴァギナ’であり、その内には「クリスマス・ベイビー」を抱えもっていることへの対抗心がありありとうかがわれました。どれほど妬ましかったことか！それから彼女は瓶に水を入れてわたしに手渡します。いかにもそれは「クリスマス・ベイビー」に授乳するための哺乳瓶といったことのようにでした。でも、それを彼女が両手でギュッと押さえたものですから、中から水が出てしまいます。それを目にした途端、彼女はわたしの手からそれを引っ攫って、自分の口で吸おうとしたのです！わたしこそが「クリスマス・ベイビー」だと言わんばかりに・・。

その翌日のセッションにおいて、彼女は「口唇愛的サディズム」を募らせませす。‘蛇’となり、両手を顎の形にして縦に大きく広げて、それで手あたり次第に獲物(ネズミとか蛙)を捕えるわけです。やがて自分の巣窟である沼地の<ヘビ池>へとしおしおと引き下がってゆきます。ここで彼女はしばし沈思黙考を始めました。どうにか「両親の結合 parental union」に向けての自らの侵入的攻撃欲に薄々気づき始めたようでした。それで彼女は「親たちを彼らだけにして放っておきましょう」的な態度に至ったようです。そこで展開した彼女の想像的遊びはこんなふうでした。彼女は‘大きなお姉ちゃんメアリー’であり、家族の皆それぞれにクリスマス・プレゼントを準備するのに早朝忙しくしておりました。そして彼女の‘幼い妹クレア’に向かって、両親が寝ているのだから邪魔しないように静かにしなさいと言いつけるのでした。父親がまず起きてきて、キッチンでいつものように朝のお茶を用意します。自分のそして母親の分も2つマグカップを手に寝室へと戻ります。そしてしばらく経てようやく目覚めの朝になります。彼女は両親の寝室に入り、彼らに準備してあったプレゼントを手渡すといったことです(1978/12/21)。このようにして、おとなと子どもとの分割 (division) を了解し、子どもらの一人としての自分を容認し、親にはプライバシーと自由を与え、生き長らえさせようとの努力(すなわち sparing) が幾らかなりとも生じてきたといえましょう。彼女は、わたしが休暇のために彼女を捨て置くことについての悲嘆そして憤りをどうにかこらえようと必死であったのです。そしてクリスマスホリデーを迎える直前のセッションが終わる際にわたしに近付いて、<どうぞ良いクリスマスをお過ごしください・・・そして、良いお年をお迎えください(I hope you will have a nice Christmas...and happy new year)>との挨拶をしました。母親に予め事前に言われていたのでしょうか。それはいかにも台本をそのまま棒読みするみたいでした。ちょっと無理したのでしょうか。それで眼がほんの少しだけ涙ぐんでもおりました。別離の際にいつものように煮えたぎった怒りやら恨みを‘尿’としてパンツのなかに漏らすやら、トイレに逃げ込んでこっそり始末するのではなくて、こうして目に涙を浮かべて表出できたということは、幾らかでも彼女がヒューマン human になったとの印象を覚えたのです。ここに至って、「尿道愛的サディズム」が僅かながらも鎮静化されつつあったといえましょう。

クリスマス・ホリデーを終えてセッションに戻ってきたメアリーは、‘自立’へ向けていっそうのこと決意を固めたといった様子を示しておりました。例えば、彼女はこんなことを語っています。彼女のこうさい母方の祖母の話です。<わたし、口うるさくあれこれわたしのこと言う人嫌いなの。ほんと、うるさいたらありゃしない・・・>とか(1979/01/08)。それでいつかセッションに来なくなることもありはしないかといった思いはどうやら彼女の頭をちらっと掠めたみたいです。わたしはまだ彼女に10月に帰国する予定であることを言っておりませんでした。しかしここではっきりしていることは、彼女がここに至って、何としてでももっと自分を片付けなくては(tidy herself up)ということ、そして心を規律化する必要性であります(a need for discipline)。それらが見た目にもはっきりとしてまいりました。例えば、「Keep-fit Class」でのエクササイズとか、フィギュアスケート教室とか、ブラウニーのガイドブックを熟読することとか・・・それに、メアリーは想像の遊びで「洗濯おばさん Laundry Lady」にもなったりしております。それもこれもすべてが‘外側の子ども outer-child’としての生き残りへの意欲に結びついているといえましょう。しかしながら同時にこの時期、彼女は心の内の密かなる危機感をも表出することがありました。時として、とても

明快に・・・彼女はいわゆる‘離乳期’を改めてここで繰り返さざるを得ないことになるとの予感があったのでしょうか。例えば、毛虫が樹木の葉っぱから落ちたとやら、それに気球(もしくは水の入った瓶)が「SOS」のメッセージを運んでいるとやら・・・それで綱が外れてしまい、床が水浸しになります。それから紙に「SOS」と書いたものを貼り付けて、それに糸を結んで窓の外にぶらさげて‘凧あげ’したり・・・それで‘濡れた涙’をなんとか乾かそうとするかのように・・・(1979/01/26)。

メアリーの治療終結について、彼女の両親(Mr.&Mrs.R)との面談(1979/02/08)において来る9月ということが決められました。メアリーは茫然自失に近い状態となります。そしてそれが何を意味するのか、彼女は四苦八苦して考えました。一つはわたしの‘死’です。そして彼女は‘孤児’になるというもの。例えば、彼女は孤児院に収容されて、そして彼女は‘親たち’が黒死病で死んだという物語を作っております。<彼らは連れ去れてしまったの・・・あつという間だったわ・・・>といったこと。また彼女が預けられていた祖父母もまた死んだのでした。その年は飢饉で作物が取れず、それで食べる物が無いわけなのです。彼女は赤ちゃんの妹を堅いパンくずを水で溶いて食べさせようとする。だが、彼女はそれを食べることができない。それでついに死んでしまう。また彼女の上のお姉ちゃんもまた死んでしまう。しかしながらもう一人彼女と双子の女の子がいたのです！彼女たちが家族で唯一の生き残り。メアリーは彼女らが耐えしのばねばならなかった、あらゆる艱難辛苦について語ります。農場での苦役。そしてついに彼女らは追い出されてしまう。そして飢えながら路上をさまよっていたとき、或る親切なご婦人に声を掛けられた。彼女は孤児院のオーナーであり、彼女らの母親の友人でもあったのです！そこですぐさま彼女らを引き取ってくれたといった話(1979/02/12)。そして、ここに至ってついに彼女の待ち望んだ「独立の日」が近付いたといったことには毛頭ならなかった。それとは反対に、彼女はこの状況は実に彼女にとって悲惨としか思えないのだった。例えばこういうこと。<わたしは洗濯屋の子どもなの。ここは刑務所の中の洗濯室。作業室もあるわ・・・>。ここで彼女は厩大な量の洗濯物を抱えていた。ここでそこらじゅうにある紙タオルなどを活用した。そしてそれらを干すのに辺り一面に吊るしたり・・・。それからアイロン掛けもしなくてはならないというわけ(1979/02/20)。そして耐えられず、ついには<どうせわたしなんてろくでなしだもの・・・どうでもいいわ。構うもんか！>と叫ぶ(1979/03/05)。彼女は自分の内側にまだまだ‘片付いてないもの mess’がいっぱいあるということに気付いていた。とても一人で片付けるなんて出来はしないといったふうに・・・。それでどうでもいいさと自暴自棄となっていていいものではなく、真実それは彼女にしてみれば内心大いに気掛かりなのであった。それで紙にその表と裏いっばいに「SOS」を書き綴った(作品例; 1979/03/07)。そして彼女にしてみれば何でこんな目に遭うのかと



誰かを咎め立てせずにはいられない。おそらく、その鬱憤の矛先は取り分けてわたしの‘夫’に向けられたということになりましょうが。そこで彼女は‘裁判官判事’となるのです。そして法廷を開いて、Mr. Wightという或る一人の男性に50年の実刑判決を言い渡すのです。その判決理由とは赤ちゃんの殺害であり、また‘クウィーン(王妃)の殺害’でもあります！ここでわたしは彼女に語った。いつか将来わたしが彼女に手紙を書くこと、そして彼女もそれに返事を書くこと、そしてもしも機会があれば日本にわたし

が彼女に手紙を書くこと、そして彼女もそれに返事を書くこと、そしてもしも機会があれば日本にわたし

を尋ねてくるのがあっていいと・・・すると何やら将来というものに光が射したかのようで、<そうだわ、わたしが大きくなったら、日本に行くわ>ということになった。そしてここで改めて‘法廷’の場面に戻る。するとなんと突如としてクウィーン(王妃)も赤ちゃんも‘裁判官メアリー’の目の前に姿を現したのです。その結果、その容疑者なるMr. Wightは無罪放免ということになったのです(1979/03/15)！

この復活祭のホリデーを迎える時期、彼女は‘セッションがなくなる日’のリハーサルに忙しい。彼女は宣言します。<わたしは学校に通う児童 a school-child なんですからね>とお芝居する。算数のレッスンに一人で熱心で励んでいるふうであった。担任から借りた電卓を使いながら・・・それはつまりのところ、彼女はセッションからもらうものをもはや当てにしないで済むといったこと(1979/04/06)。そうだとしても、彼女にしてみれば、わたしの心のうちにまだ‘スペース’があるということは大事なことのように思えた。彼女は「お家」を描く。家族が何人かとか、寝室は幾つあるのかとか、彼女はあれこれ頭を悩ましていた。「お客さま用の寝室」はあるのかとわたしが聞くと、すぐさまうん、そうよ。だけどそれもわたしがホリデーの旅行で留守にしている間だけのことだけど・・・>と返答する(1979/04/23)。しかしながら、将来のわれわれの間に横たわる溝はどう見積もってもあまりにも越え難い。そして彼女のなかでいちいちあれこれ内なる疑惑の声が彼女を悩ます。問題は‘覚えていてくれること remembering’であった。そして愛情ということでもある。それで彼女に或る考えが浮かんだ。例えば、<先生はサクソンだわよね。バイキングじゃないのさ。・・・ほんと、やることってただ話すだけじゃないのさ。バカみたい！頭痛がするだけよ。・・・そもそもなんでわたしにここに来るように言ったわけ？そもそもなんでわたしにご一緒しましょうと言ったりしたわけ・・・(Why you dared to ask me to come? How dared you ask me a company?!)。彼女は泣きじゃくりながら、支離滅裂な言葉のあれこれを吐き出す。それからふと正気に戻ったふうにくフン、(こんなに取り乱しちゃって)わたし、バカみたい。わたしは先生なんかよりずっと賢いんだからね。行っちゃいなさいよ。あんたなんて、わたしのこと好いてくれてないんでしょ・・・愛してくれてないんでしょ・・・わたしの両親みたいにね・・・>と訴える(1979/05/03)。絶望は途方もないものであり、彼女はわたしに対してこれみよがしに厭味で応酬することしかできなかった。そうすることで彼女はわたしに‘済まない’という罪悪感を抱かせようとしたわけだ。<誰もわたしのこと好いてくれない>と苦々しく語った(1979/05/08)。紙に茶色のクレヨンで何か字を書いていた。そして<ねえ、茶色ってどういう意味か知ってる？・・・サヨナラってことよ>と語る。いかにも小バカにしたみたいに嘲って・・・(つまり尻を向けてオナラをするみたいに?) (1979/05/10)。

そうであったとしても、彼女はわたしに対して幾らか感謝の念を抱き始めたようだ。「高級な‘石鹸’、それもかなり上等で良質のね(a soap highly qualified)」、そう彼女はわたしについて語っている(1979/05/11)。さらには<そうよねえ、先生がお仕事とつても一生懸命だってこと、わたし知ってるわ(I know you work hard)。たくさん子どもたちがいるんですものね。でしょ?>と。それからわたしがどれほどそうした大変さに耐えられるのか、そのレジリアンスをテストする意味なのか、紙タオルを流し台で水浸しにする。何やらぶつぶつ独り言を呟いていた。<お仕事しなくちゃ・・・ぼろぼろになんかなっちゃういけないわよね(・・・for work・・・should not get torn out)>(1979/05/11)。これはいうなればメアリーらし

い、愛情の試し方なのでしょう。対象が完全にぼろぼろに擦り切れるまでは、その愛情が充分とは思えないといったこと。週末を迎えて、彼女は不安になります。どうにかして Miss Yamagami を自分の内に生かしたままで保存 (sparing) しておかねばならないということに気づいたのでしょう。それでこのセッションの最後に彼女は奇妙なことをしました。濡れた紙を折りたたみ、さらにそれを濡れた紙で覆い包み、糸でぐるぐる巻きにして縛ります。そうして乾かすんだとか。そこにはご丁寧に「Mary」の名前が書かれてありました。それを自分の箱に入れて置いてくれとわたしに頼んで退出します。これが何を意味するか。勿論セッションの合い間に決して迷子にならないように、わたしのなかに「オシッコやら涙に塗れた赤ちゃんメアリー (Shitty Mary)」を抱えていて欲しいということでしょうが、また「石鹸の Miss Yamagami」をパッケージのようにして彼女は「内なる対象」として取り込んだともいえます。それは是が非でも彼女には必要であったのですから。彼女はかつてこんなことを語っております (1979/01/09)。<わたし、甘やかされた子どもよね。絶対的にわたしの両親はわたしのこと甘やかしているわ>と。そして<甘やかされる女の子っていいわあ (it is nice to be a spoilt child)>と付け加え、嬉し気に笑顔を見せました。でも真実、そのお蔭で彼女は<臭い臭いメアリー>でどれほど他の子どもらに嫌がられたでしょう。衣服の着脱やらその他何一つまともに自分では出来なかったのです。その手先の不器用なこと！鉛筆を握ることすらままならないのです。決して甘やかしがいいわけではないのです！薄々彼女はその自覚があったかと思われます。だからこそ「特製の石鹸 Miss Yamagami」が要るといったことになりましょう。でもそれが彼女の内側で果たして効力を発揮するかどうか、なかなか難しそうでした。なぜならば、ペシズムが彼女の心のなかに深く染み付いていたのです。それが彼女の愛情の能力における信頼感をダメにしてしまうといったことのようにです。彼女にとって真に平穩 peace を覚えるとしたら、それはすべてが死線を越えた向こうにある (dead-end) といったことのようにです。例えば、メアリーが語ったところによると (1979/07/09)、「死者の王国 Kingdom of the Dead」というのがあるんだそうです。そこでは彼女がキング (王様) ということらしい。まず最初に地上の生きた人々を惨殺するんだとか。そして彼らを彼女の「奴隷」にするというわけです。大した仕事というのではなく、ただ部屋の隅をちょっと掃除するだけ。そして「死んだ動物たち」に「腐った穀物」を餌として与えるといったこと。まるっきり恐怖映画そのもの！（部屋中が彼女のオナラの臭いで充満しておりました！）それで幾らか自分でも辟易したのか、場面がなんと「寺院」へと急展開し、彼女は天を見上げて神に祈りを捧げるのです。<おお、我らが神よ。ご加護を (Oh, God ! Give us Blessing !)>と。だが尚も修羅場は続く。戦闘シーンの後、死者たちは「死者の国」へと連れて行かれる。それもいかにも幸せそうに happily ということらしい。なぜかといえば、<それはね、(死者の国では) 皆誰しもが幸せってことなの。誰ももう一度地上に戻って生きたいなどと思わないの。何故って、生きるってことはあれもイヤこれもイヤってことばかり、不平不満がいっぱいでしょ (nagging and nagging)。でも墓場、死者の世界ではさ、誰もがただそこに横たわっているだけだもの。でしょ？>。ここに彼女のシニシズムは底無しに無気味で醜悪な様相を帯びていたといえます。さらには、その「死の闇の世界」の死者たちの幾人かは再びこの「生きた世界」に誕生しなければならぬのだとか。それも意志に反してであって、親たちが無理矢理彼らをこの世へと引っ張り出そうとするからなのだ、と彼女は語ります。この叙述は、実に彼女の誕生そのものを語っているようで

した。それで今尚もこの世に産まれたことの‘恨み’を引き摺っている？！これこそが‘あまのじゃくのメアリー’です！しかも己の‘穢れ’を意識してか、「^{けが}浄め＝^{きよ}救済」を心底求めてもいたわけですよ！

次のセッション(1979/07/10)では、まるで「死者の世界」のことをすっかり頭から振り払うかのように、彼女は想像的遊びで「生きた人々の世界」を展開させてゆきます。「オープン・デイ(open day/学校見学の日)」ですよ！テーブルそして椅子をセッティングし終えると、わたしも参観者として招かれ、椅子に腰掛けます。彼女はヴィクトリアという名前の生徒です。他にもエリザベスという女の子などがおります。さて、まずは算数のレッスン。担任の先生(Miss)の質問にメアリー＝ヴィクトリアは張り切って手を挙げて答えます。それから宿題の図画に移ります。彼女はいっそう張り切って絵について説明を加えます。田園風景です。空には雲が流れ、青々とした草原が広がり、花々が咲いております。乾いた干し草も積まれてあって、絵の上端には大きな赤い太陽が輝いておりました。さらには綴り方のレッスンです。担任の先生から彼女はとても褒められます。やがて学校給食の時間。<あらまあ、わたし黒板を拭く当番なの忘れてたわ>と慌てます。それを済ませて、彼女はわたしを伴って食堂へ。わたしも参観の父兄の一人として給食のお相伴に与ったというわけです。フルコースでなかなかのご馳走でした。その後、校庭へと出て、そこに装備されてあった遊具類について説明がありました。それに各曜日の「時間割」についても。子どもたちが飽きないように自由時間がいっぱいあるんだとか…。それから最後に、「サヨナラの前のストーリー・タイム」の時間がもうけられました。こうして、どうやら「生きた世界」も満更でもなさそうな…。危なげなく活力に溢れており、いかにも「学童期のメアリー」なのでした！

彼女が9歳の誕生日を迎える頃には(1979/07/14)、わたしのことを彼女の叔母さんみたいな誰か、つまりチャイルド・サイコセラピストであって、でもクリニックの外でも接触を持つことが可能な誰かとして、つまり言うなれば‘名付け親’的な Miss Yamagami といったことを考えるようになります。それは「タヴィストック」の玄関口のエレベーター前で偶然われわれが鉢合わせし、エレベーターと一緒に乗り込んだということがきっかけでした。われわれは唯ハローと互いに挨拶しただけでしたが、彼女は目を丸くして初めて見るセッションの外の Miss Yamagami を凝視しておりました。確かに彼女はわれわれそれぞれには‘外の世界’があるということ、そしてそれぞれに未来があることを信じ始めたのであります。そのためにも問われるのはわれわれが互いの記憶を持ち続けるといったことでもあります。例えば、彼女は一枚の写真のことを語ります。そこには彼女自身とそれに一匹の犬とが写っておりました。金色の毛髪の犬です。彼女はただ道端で会っただけなのですが、とても大好きになったということでした。その飼い主については全然知らないのだけれども…。とのこと(1979/07/13)。さらには彼女がハサミで紙細工を作っていたときのこと、それらが出来上がったとき、彼女はそれら切り抜いた丸い形のを元の紙に戻そうとしました。このようにして彼女は‘一緒 togetherness’と‘別々に個々である separate one-ness’ということの変容についてどうにか折り合いをつけたといえましょう。つまりのところ、一緒でも別々であることが出来、別々でも一緒であることが出来るといったこと。しかしながら勿論のこと、別離に伴う涙にまだまだ苦々しさ(bad feeling)が加味されていないわけでもなさそうです。彼女は何やらとても深く思いに沈んでおりました。

そして或る想像的遊びのなかで(1979/07/17)、彼女は病院に収容された子どもになっておりました。気管支炎に罹ったんだとか。その場所はとても理想的な場所にあり、海辺に近く、また歩いて近くの牧場に行くと新鮮なミルクを飲ませてもらえたり、新鮮な野菜も買い求めることだって出来るんだそうです。ここで描かれた絵は新鮮な空気と陽射しに溢れておりました。患者たちはそれぞれに個室が与えられており、彼女の場合は特に病気が重いので、彼女のベッドの両側にお父さんそしてお母さんが寝るベッドもあるんだとか。そこでわたしは、<いつか彼女に自らの内側に生きてゆくだけの力が得られるようになって、もはや医者やら看護婦たちからの世話を得ずともよい時が来るわね。そしたら退院になる。それはいつになるかしら・・・>と尋ねる。そして、これがさらにはメアリーのここでの治療終結についての取り決めと一緒に相談することとなったのです。そしてわたしとしてはちょっと驚きだったのですが、彼女は積極的にわたしと共にそれについて考えようとする姿勢を示し、そして5週間の夏季休暇のあと、9月の最初の週の数セッションのみで終わりにするといったことが取り決められたのです。そしてこの日のセッションの終わり、彼女は嬉しげにそこらじゅうを跳び回っておりました。そこで彼女が全然病気の子どもみたいじゃないのねと示唆しますと、彼女は<・・・だってもう6ヶ月は過ぎたもの>とのことでした。靴とソックスを履き終え、<もう準備できたわ(Oh, quite readily)>と彼女は退室しました。ここを立ち去る心の準備は出来たようでありました。勿論のこと、夏季のホリデーの直前まで幾らかいつものスツタモンダがあったのは事実ですが・・・。

そして、ホリデーからセッションに戻ったメアリーはいかにも落ち着いた物腰で一段と成長したかのような雰囲気であつたのであります(1979/09/03)。彼女は機嫌よく、晴れやかで、思慮深く、そして気分も穏やかでした。彼女がセッションに戻ってきた日、<夢は、休み中全然見なかった。頭の中が真っ暗だった>と言うので、もしかしてわたしがセッションに戻ってこないのではないかと恐れたのかしらと訊くと、彼女はそれを否定し、<そんなことはないわ。全然不安なんかではなかった。だってわたしは Miss Yamagami のことよく知っているもの・・・自分のこと、わたしが先生と一緒に人だつてこと分かっているしね(I know I am a person with you!)・・・>という返答でした。それからわたしが、じゃあわたしも人 person だつてことになるのねと問いただしますと、彼女はちょっと笑つて<そうよ！>と言います。で、ちょっと間を置いてから<でもそれって、だから問題なのよね>と沈鬱な面差しで付け加えたのです。彼女はそれ以上何も語りませんでした。その意味するところは実に明快でありました。この‘一緒 with you’という言葉の意味するところは、かつて「闇の帝王」の虜とりこにされそうな彼女の救いを求める叫び「コンタクト(Contact)！」が、とにかかくにも誰かに届き、聞かれるものと信じられてきた証あかしではなからうかと思われまふ。かくしてメアリーは、彼女の「死者の世界(World of the Dead)」からの生還を果たしたとも言えそうです。彼女は、この「メアリーは一人の人 person であり、Miss Yamagami も一人の人 person」だというこの趣旨についてさらなる検討を加えてゆきます。この後の3回のセッションで最終回までにさらに・・・。誰かへの想いおも(愛)はいかに脆く壊れやすいか。「滋養的乳房(feeding-breast)」の取り入れが増すにつれて、依存的愛およびその豊かさ・良きものへの憧憬を深める過程で羨望、嫉妬、抑うつ苦痛が喚起されまふ。それらに耐えて、尚も求め続けることができるかどうか、まだまだ不確実なメアリーであつたのです。想いおも(愛)を抱えるための心(mind)とはどう培

われるべきか、とりわけ‘愛しさ余って憎さ百倍’の燃え滾る憎悪(hatred)がそれを台無しにしないためにはどうしたらいいのか、が尚も課題として残されておりました。そこで‘考える道具(thinking tools)’への内的欲求に促されて、彼女はジュニア・スクールへの転校に意欲を募らせていたことになりました。わたしとしては、彼女は言うなれば新しい学校の制服にすんなりと納まったといった印象を覚えたのです。両親の言葉を借りるならば、メアリーは今や申し分なく‘年齢相応の子ども up-to-date child’になったということのようでありました。確かに彼女は気楽に社交的に振舞うことが出来るようになっておりましたし、かつ社会的なマナーもすっかり身についたかのようでありました。同時に、或る意味で自己価値 self-value といったことも・・。今や彼女はしっかりと勉強をして、もっと大きく成長したいと願っているようにうかがわれたのです。

わたしは治療終結後、メアリーの両親と最後の面談を致しました(1979/09/07)。彼らは、メアリーの成長には著しいものがあると報告されました。自分で責任を引き受けるということが出来るようになっていくということ、そして見るからに彼女はいかにもハッピーなのです。確かに顔は晴れやかで、よく笑うようになっていたのです。それとは別に、彼らは特にメアリーのなかに抽象的思考が目覚ましく、それにとても興味を覚えるとのことでした。それら彼女の発想は極めてユニークであり、そして彼女の年齢ではむしろ珍しいとの印象を抱いておられました。そして彼らはメアリーの教育について今後のことを大いに期待できるとも考えておられました。メアリーは昨今いろんな場に出掛けるようになり、活動範囲が広がり、交友関係も何ら問題がないこと。9月から新しい学校への入学も出来たこともあり、この時期の治療終結は実にタイムリーであったわけです。両親はメアリーの内に根深く潜在するペシミズム(pessimism)やらネガティヴィズム(negativism)についてはよく承知しておられました。母親がこんなことを語ってくださってます。<いつだったかメアリーが「私なんて死んでたほうが良かった」と語ったことがありまして、ほんとにぎくりとさせられたんですの(Mary said once before ‘I wish I should be dead’. That scarred me)>と・・。ですから、いずれ彼女の青年期に於いて何らかの問題が生じるやも知れないといった懸念を否定なさいませんでした。メアリーは、その最終回のセッションにおいて、確かにこれでセッションが打ち切られるという現実と直面し、それまでの物分りのいい、お利巧さんぶった物腰をかなぐり捨てたふうに、一時混乱して慌てふためいた感じがありました。彼女のいつものしつこさでもって、幾らか抵抗を試みずにはいられなかったようでしたが、その後両親から見て、彼女に‘動揺’の兆しは何ら見られないということでした。彼らのどちらも、こうしてメアリーの治療が実にスムーズに終結を迎えられたということにむしろ驚きを隠せない思いでいらしたのです。わたしにとても感謝されておいででした。わたしもまたメアリーから実に多くのことを学んだことを述べ、この間ご両親から並々ならぬご支援いただきましたことに感謝を伝えました。彼らはそれを笑顔でとても嬉しそうにお聞きでした。メアリーがいつかわたしにさよならの手紙を書くと言っていたことを、彼らは伝えてくださいました。

ここで最後に、この症例の個人スーパービジョンをお願いしましたDr. メルツァーがメアリーについて語ってくださった言葉を付け加えましょう。彼は、<これほどまでに懸命に分析に取り組んだ子どもはとても稀だと思う(it is very rare that anyone works hard as much as Mary does)・・>とおっしゃったの

です。そしてわたしとしましても、メアリーは彼のこの褒め言葉に値すると思いますし、誇らしくも思えるのです。でも正直なところ、メアリーとの分析治療が終了に至った今尚も、わたしの心の内にはまだまだ彼女から受けた‘傷’やら‘痣’^{あざ}やらが疼くような気分にいることは否定できません。大いに私のレジリエンスが試されたということになりましょうが・・・。しかしながら、とにかくにもこうしてわれわれは共に為すべきことを為したと言えることがまことに嬉しく思われます。そして大きな安堵を覚えております。そして彼女が将来どのような一人の女性として成長するのか、とても好奇心を覚えます。是非ともそれを見届けられたらいいのですが・・・。

Chizuko Yamagami
(Child Psychotherapist)

■ 後記 —アンタゴニズム(心のスツァモンダ)を抱えて—

メアリーの両親は、「Mensa」で知り合い、結婚したのだと聞く。この「メンサ」とは、知能テストで全人口の上位2%に入る人の社交組織なんだとか。つまり彼らはイギリスでは‘超エリート’ということになる。だとしたら、誰もが、では一体彼らの娘メアリーのこのザマは何だと呆れ果てる。浮浪児みたくに臭う、汚い。散らかし放題。その手先の不器用なこと！何一つ自分では出来ないし、やろうともしない。だが周囲の人々の困惑を尻目に、彼らはただひたすら娘を溺愛し、他の子どもらが彼女を‘臭い臭いメアリー (smelly Mary)’として遠ざければ、いじめられたとむしろ娘を不憫がるばかり。自分たちに非があるなどとは思わない。全然悪びれず、学校にもしょっちゅう出入りしてはメアリーの世話を焼こうとする。子どもの躰けという点では、彼らはいかにもメアリーに対して親として無能であったのは事実だから、学校の校長先生が、メアリーの心理治療に反対した。彼女の見解は、親が問題だということに尽きる。まさにその通りとも言えよう。だが、わたしがメアリーと関わった治療期間において思うのは、やはりメアリーが問題だということである。

彼女には、この年齢の子どもに普通あるはずの「わたしがやる(主体性)」が欠如していた！誰しもが誕生後、まず呼吸すること、栄養摂取すること、排泄すること、手でモノを掴むこと、そして直立歩行することといったことが自然の理として本能として身に付いているのが健全ないのちであろう。だが、彼女の場合、呼吸を除けば、何一つまともではなかった。それはいわゆる「発達遅滞」というとも違う。彼女は‘確信犯的’ともいえるほどに、執拗に頑として「胎内回帰」を狙う‘反復強迫’があった。このいたいけない、あどけない、黒い瞳の女の子を親たちは躍起になって愛した。彼女を失うことをどれほど彼らは恐れただろう。確かに、誕生後の最初の3日間、保育器で過ごしたことが彼女にとって人生の始まりの大きな‘躰き’であったかも知れない。体重が標準以下であったからという配慮らしいが・・・。この保育器での3日間、母親は赤子を抱かせてもらえず、しめ出されているように感じたと言っている。これがメアリーの一生引き摺る‘外傷体験(トラウマ)’になったとも考えられる。それで飽くことなく「母子一体化」が希求されたともいえようが、その執拗さはとても尋常ではない！

或る日のこと(1979/06/22)、それはもうそろそろ治療終結に近い時期であったのだが、彼女は、紙細工をしていた。〈ほらね、ただのパターンよ〉と彼女はわたしに見せる。〈小さなサークルと大きなサークルが一緒になったり(coming together)、離れたり(coming apart)するのよ・・〉と、それら渦巻状の真ん中を摘まんで引っ張り、上下に動かしながら説明する。やがてそれら2つのサークルの端を合わせようとした。そこでわたしが、〈それって、恰も母親と赤ちゃんが腕をからませて互いに抱き合い、キスしてるみたいだね〉とコメントした。すると彼女は、それがどうも気に入らなかった。もう一枚別の紙を取り出し、その上にこの2つの繋がった大小のサークルを載せて、ノリでびっしりと貼り付けた。そしてさら



にもう一枚の紙をその下に敷いて念入りにノリをびっしりと付けて貼り合わせる。そして色塗りをした。真ん中の小さいサークルには‘穴’があった。この作業の間に、真ん中辺りが一部破損してしまう。どう見ても、実に母胎からヴァギナを通してオギャー！と外へ出てきた赤子について語られていたとしか思えない。だが、ノリでその出口はバッチリ‘封印’された！ここで赤子はまるっきり‘胎内戻り’したかのような感があった(図例)！

それが何であれ、誰であろうと、隙間なしにペタッと‘貼り付こう’とするのが彼女の特徴である。セッションで与えられた「糊のついた色紙」を彼女が喜んだのも理由のあること。いかなる‘切れ目’も自他の「隔たり」であって、それは彼女に疎外感(締め出される！)を募らせるがゆえに忌避された。それが、母乳が6週間で断念された理由でもあったろう。乳首を舌で掴んで口でオッパイにリズムを与えながら乳を吸うということ、その主体的な‘バトル’が彼女には出来なかったのだろう。ただ受け身でしかない彼女にしてみれば、そこに立ちただかる「乳首＝父親ペニス」が隔たりをもたらし、「内・外」を仕切るもの、規制するものであるがゆえに毛嫌いだのも当然のこと。それを邪魔者として断固‘引き抜く’こと、つまりオッパイに‘穴’を開けることが彼女にとって飽くなき執心となった。だが、それがため、その「母親オッパイ」は彼女をコンティンできない。それでひたすら‘穴’から奈落の底へと墜ちてゆく恐怖に取り憑かれていたと思われる。この悪循環のなかに嵌ったまま、彼女は逃れるすべを知らなかったと思われる。それがセラピー開始時のメアリーであった。

ここに一枚の絵がある(図例; 1979/07/17)。これは彼女が語った病院に気管支炎で入院したという物語を語った際に描いたものである。この病院の建物は、何とシースルーである(透けている！)。いかにも‘穴’だらけといったところ。それら‘穴’は彼女の語るところの患者一人ひとりの個室だとしても・・。わたしは訝しい思いはしたが、まだこの時点ではその意味するところがよく分からなかった。だが、ここにどうやら、彼女が保育器にいたころの誕生後の最早期の「感情の記憶(memories in feelings)」が語られてはいないか。それを思い知らされた或る驚愕の事実がある。やがて治療終結を迎えたのだが、その最後のセッションを済ませて、わたしは部屋に戻り、ふと彼女が残していった或るも

のを凝視していた。それは窓ガラスに張られた水浸しの‘切り絵’であった。それは何らかのパターンというよりも、幾つも切り抜かれた‘穴’だらけの一枚の白い紙でしかなかった。それは、彼女が入院したという物語の折に描かれた病院の建物と酷似していた。そっくりだったのだ！わたしは呆然自失した。このメアリーの‘置きみやげ’、それは象徴的に‘穴’の開いた母親オツパイ＝お尻」を意味していたわけだ。そこでMiss Yagmagamiは‘ビショビショのオシッコ塗れのお母さん’といったところだろう。「アッカベー！」され、ポイ捨てされた気分だった。そしてそれこそがセラピー開始時からの問題なわけであり、それこそ「振り出し」に戻ったふうで…。わたしはメアリーの治療終結が時期尚早であったかも知れないと一瞬後悔の念を覚えた。だが、やはり今は取り敢えず分析治療はここまでだという考えに落ち着いた。そして、Dr.メルツアーもそれを支持して下さった。

メアリーからわたしは「尿道愛サディズム」とは何かをわたしは学んだ。この対象を取り込み、とことんぐじやぐじやに汚そうとする執心の凄まじさ。彼女は或る時わたしに尿失禁について語ったことがある。＜ママが言うの。あらまあ、また濡らしちゃったのね (oh, you wet again!) っつて…。(いかにもほとんど困り抜いたような、でも諦め顔といった感じ！) それをさも面白そうに語った彼女がいる。全然悪びれるどころか、いかにも開き直って、だってわたしはそうしたいんだものと嘯いているふう…。この場合、＜親を舐めるんじゃないの…。＞と彼女の頬をピシヤリとやってあげるのがむしろ躰けにはなっただろう。彼女の親にはとてもそれが出来なかったわけで…。愛の対象をとことんボロボロに喰らい尽くし消耗させずには気がすまない。そうやって初めて「誰のものではない、わたしのもの」になるということらしい！この驕慢さは許されてはならない！ここで Dr.メルツアー言うところの、心の内で内的対象をたえず大事に生かし続ける努力「スペアリング(Sparing)」の能力が問われていた。

わたしは彼女にこのまま「オシッコたれのメアリー (Shitty baby-Mary)」でいるつもりかと厳しく問うことがあった。それには＜大嫌い！ (I hate you)＞というのがいつもの彼女の返答であったのだが…。セッションの途中でトイレに駆け込むこと、そして終了時間を守れず、退出してしまうこと。規律に抗おうとする、反抗癖(negativism)の彼女にわたしは手を焼かされていた。この「大嫌い」というのはいつものことで、時折口惜しげに彼女はわたしに近寄り、膝をピシヤリと叩いた。そして或るとき、彼女はわたしに向かって怒鳴った。＜I hate you, because you don't love me(大嫌い、だって先生はわたしのことを愛してくれてないんだもん)＞と…。この瞬間、薄々は分かっていたことだが、このわたしの目の前にいる小柄な7歳の子どもの実は彼女の母親その人なのだとすることが得心できた！彼ら両親の面接を担当していたソーシャルワーカーの Mr. Trucleから内密にうかがっていた話では、母親は父親にこれとそっくり同じ言葉を投げかけている！そして激しい諍いの果て、彼を玄関の外へと締め出すのだ。それで父親は＜こんな目に遭わせておいて、なんで愛するなんて出来るもんか＞と応酬したようだが…。でも、彼らは決して仲の悪いご夫妻ではない。ここでもう一つ興味深いことを聞いている。メアリーの母親は、妹の誕生時に伝染性の病気のため母方の里に一時的に預けられていたんだとか。どうやら彼女のなかの幼少時の‘片付かない’思いがメアリーとの間で反復されているようだ。つまりのところ、‘やさしさ’を求めることが彼女には人一倍熾烈であったように思われる。その結果というのだろうか、

「求めながら^{あらが}抗い、抗いながら求めていた」。(これこそがアンタゴニズムである！)それは娘のメアリーにしても同様なのだ。

ここでついでに述べると、‘やさしさ’を求めていたのは父親にしても同様なのであった。どんなに娘から愛情を求めたか！娘に嫌われるなど、とても耐え難かったろう。親面談の際(1979/02/08)、メアリーのめざましい‘進歩’についてはさまざまに語られたわけだが、それとはまた別にその深い愛情の能力(her capacity for deep loving and affection)が話題となった。そして父親は、それについてさらに、<あの子はとってもやさしいのです。わたしたちなんかよりもずうっと…。それで時としてそのやさしさに自分などはまるで値しないと思うことがあるんです(she has feeling so gentle and tender much more we both are capable, which sometimes makes me feel I am not deserved for it)>と、目に涙を浮かべながら、そうわたしに語った…。日頃いかにも‘魔女の猫’のようにオソロシク気まぐれで、手の焼けるメアリーを見慣れているわたしだったから、これには返す言葉がなかった。でも、両親はようやくにして彼らの求めたもの(‘やさしさ’)を手にしたのだということが理解された。ユダヤ系のミドル階層という出自からして、このユニークなご夫妻それぞれの生い立ちがどれほど難儀なものであったろうかと幾らか推察され、やはり何やらわたしは感動を覚えた！

ここに一つ興味深いことがある。ごく最初の頃からだが、わたしはふと或ることに気付いていた。メアリーを待合室に迎えに行き、一緒にセラピールームへと並んで歩いている折りに、彼女は横目でちらちらりとわたしの着ているものを見遣っていた。わたしはいつも服が汚れてもいようにエプロンのようなものを羽織っていたのだが、毎回わたしがどんな服装をしているのか、彼女は気にしないわけにはゆかないみたいだった。目の隅で執拗に注視していた。そしてその視線は自分の着ている服へと戻る。そのみすぼらしさを認め、いかにも溜め息が聞えるようだった。Miss Yamagamiみたいにオシャレしたいと彼女が憧れたかどうか、それは知らない。決して口では語られていない。だが、わたしは、この薄汚れた服装をした、ぼんやりと眠りこけたような子どもが内心自分の身なりに決して無頓着ではないことに気づかされ、不思議とすら思えた。つまり、それは真っ当な「外側の子ども outer-child」でありたいと願うことの一步なのだから…。実のところ彼女には2人の従兄^{いとこ}がおり、お兄ちゃんのウィリアムは寄宿制のパブリックスクールだから滅多に会わないが、近所に住む弟のほうのサムとは頻りに会っていた。メアリーは自分の年齢に近い彼をととても好いていた。だからどうしても「可愛い女の子」になりたかったのだ。それは彼女が治療を受けるに当たって、勉強が出来る子になりたいと言っていたのと負けないぐらいに、彼女の密かなる願望であったはず。それこそ口には出さなかつたけれども…。クラスメートに誰か気になるオシャレな女の子がいたかどうかは知らないが、対抗意識を剥き出しにし、折々に理由もなしによくわたしに向かって「大嫌い」と言うのは、わたしを借りて、自分の姿を自分のまなざしに映すことをしたからだろう。無論、それは辛い現実だった。「あなたはわたしではない！それが忌々しい^{いまいま}！」、まあそんなところだろう。だが、それを乗り越えるべく、未来が模索されねばならなかつたわけで。つまりのところ、彼女は、わたしを「求めながら抗い、抗いながら求めて」いた。この「アンタゴニズム」が躓きの石であり、だがまたそこに辛うじて踏^{みち}みとどまることで途は拓かれていったわけで…。

彼女の両親は決して服装に無頓着であったわけではない。だが、どんなに身綺麗な恰好をさせても、メアリーはすぐにまたくあらまあ、また濡らしちゃったのね」というわけで、着換えさせなくてはならず、つくづく根負けしていたといったところだろう。「尿道愛サディズム」でこの母子は切っても切れない癒着した関係にあったともいえるわけで・・・。待合室に迎えに出向くと、メアリーのお尻がお母さんのお膝を占拠しているのを見るのがあった。それで指しゃぶりをしながらお尻をモゾモゾやっている！彼女は7歳を過ぎている。やはり奇異な印象を与えた。彼女は決してそれをいいとは思っていなかったはず。受付にいた美人秘書マリヤンの装いをも意識していたのは間違いない。くわたしも可愛い服が着たい。Miss Yamagamiみたいに・・・」。そう思ったかどうかは知らない。だが、それも一つの契機として、彼女を背伸びさせたとしたら、それももっけの幸いということになる。彼女はかつての‘いじめ’を振り返り、くでも、いつかわたしが10歳になったら、誰もが皆わたしを好きになるわ！>と言っていた。この気概！それで、いつしか時を経て、『Mother Care』の子供服の年齢別リストを眺めながら、くわたし、服がたくさん必要なの(I need lots of clothes)>ということになったのは想定外だった。「わたしだって、可愛い女の子になれる！」、その自信は大きな安堵であったはず！

自分の内なる「アンタゴニズム」に足を掬われ、のたうち回っていた彼女がいた。どこに‘出口’があるやら、それを考えること。そうした考え深い(thoughtful)子どもにメアリーがなることを親たちは応援していた。煎じ詰めれば、わたしとの治療はまさにそれだったのだから・・・。そして遂に彼女は、自分は一人の人であり、Miss Yamagamiもまた一人の人であり、だがそれでも尚「二人は‘一緒の’人である(‘I am a person with you’)」ことが出来るとの考えに至った。ブラボー！である。それで、ひとまずここで終わったとしても、これで終わりとは到底思えない。やはり彼女の心の奥深く巣食う「虚無主義(ニヒリズム)」はとことん気掛かりである。いつか彼女はこの‘続き’の分析治療を為さなければならないだろう。親たちがそれぞれにそうであったように・・・。それは精神分析のみがなし得る何かだとわたしは思うから・・・。一瞬マーサ・ハリスの顔が浮かんだ。そして、わたしは夢想する。もしも彼女が生きておいでだったら、青年期になったメアリーを託したかった。彼らは出会えたかも知れないのに・・・と。メアリーのニヒリズムに抗して敢然と闘うことのできる精神分析家は彼女を措いて他にはいない。その早過ぎた突然のご逝去が惜まれる！

「アンタゴニズム antagonism」とは、心の内なる「迷妄の闇」である。しかし、そこにこそ個人それぞれに隠された固有の‘真実’がある。その隠された‘真実’を言葉(ロゴス)を駆使して、手繰り寄せんとする営みが精神分析である。そして救済＝光明(enlightenment)に至る途へと導かれる。これこそがわれわれ精神分析家の信(faith)である。この内なる「アンタゴニズム」、すなわち‘ああでもないこうでもない’といった‘心のスツモンダ’と無縁であると思う人にとっては、精神分析は無益なものでしかない。それを学ばせてもらったのがこの「症例メアリー」であった。「分析の子ども」としてのメアリーを、わたしはとて得難く思う。

(2018/05/05 記)